

新時代に生きる資質・能力が育成できる教育活動

－特別活動・総合的な学習の時間を通して非認知能力を育む－

華井 崇博（京都市総合教育センター研究課 研究員）

Key Words : 非認知能力, 特別活動, 総合的な学習の時間, キャリア・パスポート, ログコンパス

Society5.0といわれる現代の社会は、AIの飛躍的な発達などにより、未来を予測することが難しい新時代を迎えている。このような社会に対応できるよう、テストなどで数値化されることの多い認知能力を育むだけでなく、主体性や社会性をはじめとする「非認知能力」の育成に注目が集まっている。本研究では、特別活動と総合的な学習の時間において、非認知能力の育成を目指す手立てを講ずる。

非認知能力を高めるためには「価値ある経験」が必要である。様々な経験ができる特別活動や総合的な学習の時間の取組を、集団の中で何気なく経験させるのではなく、一人一人に合った目標設定から一人一人が成長をふり返る「価値ある経験」に導くため、長期ログ・中期ログ・短期ログから構成される「ログコンパス」を提案し、実践校においてその取組を行った。

非認知能力の見取りとして、実践の前後で「能力チェック」を行った。その結果をログコンパスに取り組んだ学年と取り組んでいない学年を比較したところ、前者の方がその数値が大きく変化しており、本研究の有効性が示された。

このことから非認知能力の育成には、目標設定→行動→現状理解→目標設定→…のサイクルが有効であり、指導者がサイクルとして機能するように適切なサポートを行う必要があることがわかった。

目 次

第1章 新時代に求められる非認知能力

第1節 非認知能力の定義

- (1) VUCAの時代に求められる力…………… 1
- (2) 非認知能力の全容…………… 1

第2節 非認知能力についての実態

- (1) 令和5年度全国学力・学習状況調査の
質問紙より…………… 1
- (2) 学習指導要領との関わり…………… 2

第3節 非認知能力の育み方

- (1) 可鍛性と「スキルはスキルを生む」…………… 3
- (2) 3つのカテゴリーの要となる
非認知能力…………… 3
- (3) 経験の価値を高める「非認知能力育成型
サイクル (NDC)」…………… 3

第2章 非認知能力を育む取組

第1節 非認知能力の育み方

～ログコンパスを用いて～

- (1) 本市での取組の実態
～キャリア・パスポート～…………… 4
- (2) ログコンパス…………… 5
- (3) 教師の働きかけ…………… 8

第2節 実践校における取組

- (1) A小学校での実践方法…………… 9
- (2) B中学校での実践方法…………… 9
- (3) C小中学校での実践方法…………… 9

第3節 実践の効果の見取り方…………… 11

第3章 ログコンパスの実践

第1節 長期ログの実践

- (1) 長期ログとキャリア・パスポート… 12
- (2) 児童生徒の反応…………… 12
- (3) 能力チェックの分析…………… 13

第2節 中期ログの実践

- (1) 中期ログへの記述…………… 14
- (2) 特別活動(学校行事)と非認知能力… 15
- (3) 総合的な学習の時間と非認知能力… 16
- (4) 児童生徒の反応…………… 17

第3節 短期ログの実践

- (1) 短期ログの記述の変化…………… 18
- (2) 児童生徒の反応…………… 20
- (3) 短期ログと非認知能力…………… 21

第4章 研究の成果と課題

第1節 教職員アンケートより

- (1) 「非認知能力」の認識について…………… 22
- (2) 教職員から見た「ログコンパス」… 23
- (3) 教職員が見取った児童生徒の姿…………… 23

第2節 能力チェックの変容

- (1) 学年ごとの変容の比較…………… 24
- (2) 教職員の意識と児童生徒の成長…………… 25
- (3) 全国調査からの変容…………… 25
- (4) スキルがスキルを生む…………… 26

第3節 まとめ…………… 27

おわりに…………… 28

<研究担当> 華井 崇博 (京都市総合教育センター研究課 研究員)

<研究協力校・研究協力員> 京都市立小学校 1校 1名
京都市立中学校 1校 1名
京都市立小中学校 1校 2名

第1章 新時代に求められる非認知能力

第1節 非認知能力の定義

(1) VUCAの時代に求められる力

VUCAとは、Volatility (変動性)・Uncertainty (不確実性)・Complexity (複雑性)・Ambiguity (曖昧性)の頭文字を取った造語で、社会やビジネスにとって、未来の予測が難しくなる状況を意味する。Society 5.0といわれる現代の社会は、AIの発達や気候の変動などにより、正にVUCAと呼ぶに相応しい“新時代”を迎えている。

このような社会に対応することができるよう、教育も見直しが行われている。テストなどで数値化されることの多い認知能力を育むだけでなく、主体性や社会性をはじめとする、数値で表すことが難しい非認知能力の育成に注目が集まっているのである。京都市でも、令和5年度の学校教育における重点項目の一つ目に「自ら問いをもち、自分の意志や判断で粘り強く行動する『主体性』と、よりよい人間関係を形成し、多様な他者との協調を大切にしながら、集団の一員として自己の能力を発揮して行動する『社会性』の育成を目指し、『自ら学ぶ力』と『自ら律する力』の向上を図る」と掲げられているが、これは非認知能力の必要性が述べられているものだといえる(1)。

(2) 非認知能力の全容

では、非認知能力とは何か。測定することが難しいとされてきた能力であるだけに多くの解釈が生まれているが、本研究ではOECDの定義をもとにした。OECDは、非認知能力を社会情動的スキルと捉え、「一貫した思考・感情・行動のパターンに発現し、学校教育またはインフォーマルな学習によって発達させることができ、個人の一生を通じて社会・経済的成果に重要な影響を与えるような個人の能力」と定義している(2)。また、社会情動的スキルの重要な機能のいくつかを「目標の達成」「他者との協働」「情動の制御」の3つのカテゴリーを設けて表している。さらに本研究では、日本生涯学習総合研究所(2022)(3)や国立教育政策研究所(2017)(4)がまとめた非認知能力の要素などを加え、3つのカテゴリーに分類して図示した(図1-1)。これを本研究が注目する非認知能力の全容とする。

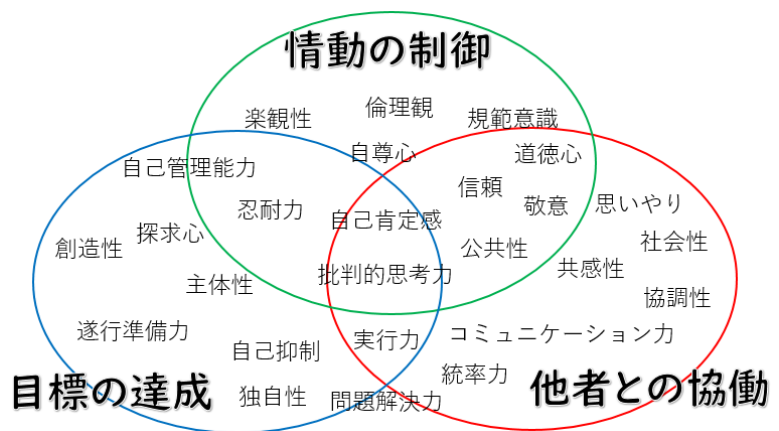


図1-1 非認知能力の全容・カテゴリー

第2節 非認知能力についての実態

(1) 令和5年度全国学力・学習状況調査の質問紙より

非認知能力は数値で表すことが難しいとされているが、全国学力・学習状況調査の質問紙などでは非認知能力に関するものと解釈できる質問項目がいくつかある。回答を集計した数値そのものが能力を正確に表しているわけではないが、本研究ではこのような児童生徒の意識調査の結果を、非認知能力を見取る一つの指標として取り扱うこととする。

令和5年度の質問紙では、表1-1のような質問があった(5)。質問4は、自分の価値を肯定的に捉えているかを問うもので、自己肯定感に関係する質問と読み取ることができる。他も同様に、質問8は思いやりや実行力、16は遂行準備力、33は主体性に関係する質問と読み取ることができる。この中で、質問4は10年前から変わらない質問項目であるが、質問8は5年前、質問33は4年前、質問16は3年前から新しい項目として続けて質問されていて、非認知能力が見取りたい力として注目されてきていることがうかがえる。

表 1-1 非認知能力に関する調査・回答（令和 5 年度全国学力・学習状況調査〔質問紙〕より一部抜粋）

No	質問	全国小	京都小	差	全国中	京都中	差
4	自分には、よいところがあると思いますか	83.5	84.9	+1.4	80.0	76.9	-3.1
8	人が困っているときは、進んで助けていますか	91.6	91.5	-0.1	88.1	85.4	-2.7
16	家で自分で計画を立てて勉強をしていますか	70.7	69.9	-0.8	55.0	47.8	-7.2
33 (37)	これまで受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか	78.8	79.2	+0.4	79.2	75.7	-3.5

そして各質問に対し、肯定的な回答をした児童生徒の割合（％）を全国と京都市、小学校と中学校で比較したところ、質問 16 から京都市の児童生徒は、家庭における学習の計画性が低い傾向にあることがわかった（表 1-1）。しかしその他の非認知能力に関する質問項目では、京都市の小学校は全国と比べてほぼ同じか、高い数値のものが多く、中学校は低い数値のものが多かった。これは表 1-1 の質問内容だけではなく、その他の項目についても同じ傾向にあり、京都市では非認知能力の育成について、まだまだ課題があると考えられる。

（2）学習指導要領との関わり

次に、各教科等の学習指導要領に注目した。平成 29 年告示の学習指導要領では、各教科等として必要な認知能力だけではなく、非認知能力の育成に関する内容と読み取れる部分が多くあり、その必要性が明らかにされている。特に、特別活動と総合的な学習の時間には非認知能力に関わる内容がいくつもあった。例えば、小学校の特別活動、中学校の総合的な学習の時間の目標の中で述べられている育成すべき資質・能力は以下のように記されている (6)(7)。(3) の学びに向かう力、人間性等の内容はもちろんだが、(1)(2) にも非認知能力に関連する語句があり、下線を引いて示した。

【小学校・特別活動】

- (1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。
- (2) 集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。
- (3) 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。

【中学校・総合的な学習の時間】

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

さらに、それぞれの「解説編」からも非認知能力に関するキーワードを抜き出し、OECD の 3 つのカテゴリーに当てはめた（図 1-2）。この図は、特別活動でのキーワードを下線、総合的な学習の時間でのキーワードを斜体、どちらにも関わるキーワードを太字で表しており、先述した非認知能力の全容（図 1-1）と関連性が高いキーワードが多いことがわかる。つまり、特別活動や総合的な学習の時間は、非認知能力を育成することが目標の 1 つになっているのである。このことから本研究では、「特別活動」「総合的な学習の時間」において、非認知能力の育成を目指す手立てを講ずることとする。

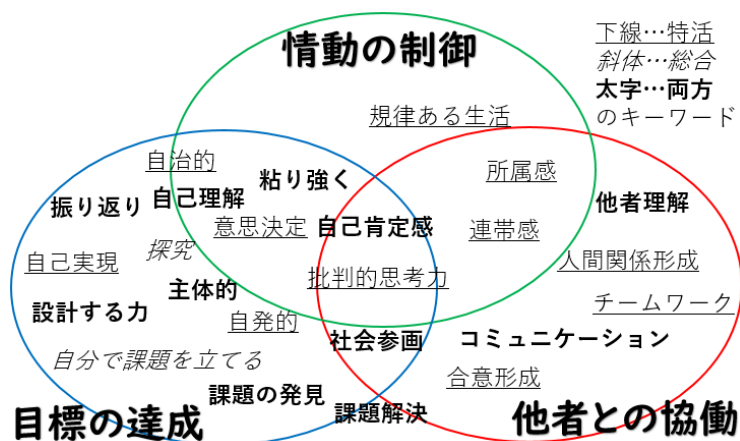


図 1-2 特別活動・総合的な学習の時間におけるキーワード

第3節 非認知能力の育み方

(1) 可鍛性と「スキルはスキルを生む」

では、これらの非認知能力はどのように育成すればよいのだろうか。OECD は非認知能力を社会情動的スキルと表し、その「スキル」の意味を「個人のウェル・ビーイングや社会経済的進歩の少なくとも一つの側面に影響を与え（生産性）、意義のある測定が可能であり（測定可能性）、環境の変化や投資により変化させることができる（可鍛性）個々の性質」と定義している(8)。さらに、OECD は「スキルはスキルを生む」とし、個人のもつスキルの水準が高いほどスキルの獲得は大きくなり、それぞれのスキルが相互作用性をもつと述べている(9)。つまり、ある非認知能力を育成することは、その非認知能力自体を雪だるま式に大きくするとともに、他の非認知能力の育成にも影響を与えるということである。このことから本研究では、OECD の3つのカテゴリーにおいて、それぞれ要となる非認知能力を設定し、その育成を目指すことが新時代に生きる資質・能力の向上につながると考えた。

(2) 3つのカテゴリーの要となる非認知能力

OECD は、「目標の達成」に必要な非認知能力として、「忍耐力」「意欲」「自己抑制」「自己効力感」を例示している。しかし、このうち自己効力感、個人が何かに取り組んだ結果として高まる能力であり、自己効力感そのものを単独で上げようとするのは難しい。また OECD の例示のままでは、どのような力を高めるべきかが、教師や児童生徒にとってわかりにくい。そこで本研究では各カテゴリーにおける目標行動を、教師や児童生徒がわかりやすい範囲で一段階細分化して示し、さらにその目標行動に必要な「要となる非認知能力」を選んで位置付けた(図1-3)。

例えば「目標の達成」であれば、そもそも「目標を設定する」ことが必要であり、その目標に向けて「自己を管理する」ことが必要である。さらに、目標を設定するためには「自己分析力」「主体性」といった非認知能力が要となり、自己を管理するためには「忍耐力」「自己制御力」といった非認知能力が要になると捉える。他のカテゴリーについても、同様の捉え方で設定した。

この図において、11個の要となる非認知能力を選び出したが、中には図1-1の非認知能力の全容に記されていない能力もある。図1-1のもととなる日本生涯学習総合研究所のまとめでは、17の非認知能力に下位項目を設定し、それぞれの非認知能力を細分化している(10)。例えばコミュニケーション力は、「他者の考えの理解」と「自己の考えの表現」を下位項目とし、さらに「他者の考えの理解」を「他者情報の読み取り」と「傾聴力」に分けて捉えている。つまり本研究で設定した「要となる非認知能力」は、下位項目を含めた非認知能力の全容から、目標行動を支えるために重要となる非認知能力を抽出したものである。

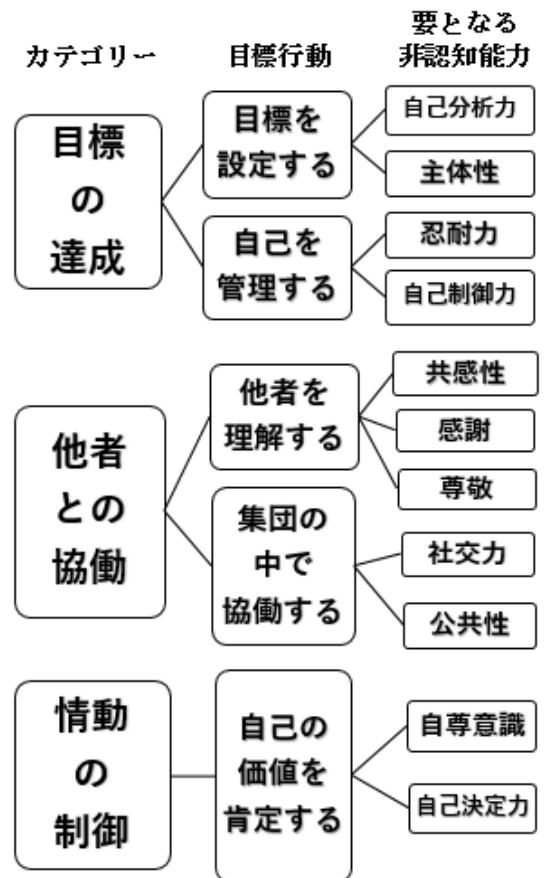


図1-3 3つのカテゴリーの要となる非認知能力

(3) 経験の価値を高める「非認知能力育成型サイクル(NDC)」

第3節の(1)で、要となる非認知能力の育成が新時代に生きる資質・能力の向上につながることを示し、第3節の(2)で、要となる非認知能力を設定した。では、その非認知能力はどのように育成すればよいのだろうか。

ポイントは「経験」の価値を高めることにある。非認知能力が必要となる場面を提供し、児童生徒に経験させることが非認知能力の育成につながることは確かだが、ただ経験するだけではその価値は低い。

経験の価値を高めるには、経験の前に自己の能力に関わる目標を設定させること、経験の後にフィードバックを提供し、自己の非認知能力について振り返らせることが重要となるのである。また、共に経験する仲間やそれを支える教師の影響も大きく、他者の行動によって自己の行動を調整させる他者調整が重要となる。これらを一連のサイクルとし、右のように図で表した（図1-4）。

児童生徒は、自己の現状を理解し、それに合わせた目標を設定、そして行動に移す。その後、行動を振り返り、新たな自分の現状を理解し、次の目標へとつなげる。このサイクルでは、目標を設定するために「主体性」や「自己決定力」といった非認知能力が必要となり、目標に合わせた行動をするために「忍耐力」や「自己制御力」、新たな現状を理解するために「自己分析力」が必要となっている。また、それぞれの段階で他者からの影響を受けるため、「他者との協働」に関する力が必要となっている。

さらに当然ではあるが、このサイクルには教師の働きかけが加えられている。目標を設定するときに自己の成長に関する視点を与えて児童生徒に目的意識をもたせ、行動をしているときに児童生徒の様子を的確に見取り、その行動を見つめるときにフィードバックを与える。また、それぞれの段階で上手く他者と関わりがもてるように働きかけをしていく。

このようなサイクルを繰り返すことで児童生徒の非認知能力が高まり、雪だるま式に能力が向上する。よって、このサイクルを「非認知能力育成型サイクル（Non-cognitive abilities Development Cycle）」と名付け（以降 NDC と呼ぶ）、「何気ない経験」を非認知能力も育成できる「価値ある経験」へと変える手段と考え、本研究を進めていく。

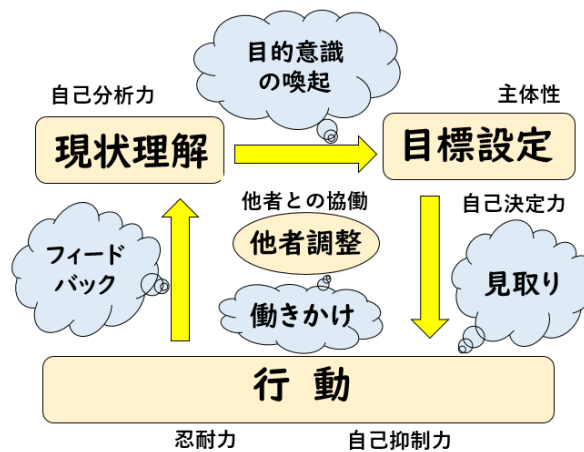


図1-4 非認知能力育成型サイクル（NDC）

- (1) 京都市教育委員会『令和5年度学校教育の重点』2023 p.8
- (2) ベネッセ教育総合研究所『家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成 - 国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆 -』2015 p.13
- (3) 日本生涯学習総合研究所『「非認知能力」の概念に関する考察〈集約版〉』2022.9 pp.3-22
- (4) 国立教育政策研究所『非認知的（社会情動的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書』2017.3 pp.7-193
- (5) 国立教育政策研究所『令和5年度全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査』 pp.9-117
- (6) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』2017.3 p.11
- (7) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編』2017.3 p.11
- (8) 前掲(2) P.12
- (9) 前掲(2) P.15
- (10) 前掲(3)

第2章 非認知能力を育む取組

第1節 非認知能力の育み方～ログコンパスを用いて～

（1）本市での取組の実態～キャリア・パスポート～

現在の学校現場において、非認知能力を高める取組は行われていないのであろうか。第1章で述べたように、特別活動や総合的な学習の時間を中心とした各教科等において、非認知能力の育成もねらいとした活動が行われていることは確かである。しかし、非認知能力を高めきれていない現状があるのは、NDCが機能していないからだと考える。

現在行われている取組の中で、NDC が含まれている取組は「キャリア・パスポート」が最も当てはまる。キャリア・パスポートとは、「児童生徒が、小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのこと」(11) と定義されており、「児童生徒にとっては、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につなぐ」(11) ことを目的としている。文部科学省のキャリア・パスポートについてのリーフレットでは、NDC のように見通しと振り返りを繰り返すことの大切さを図示している (図 2-1)。



図 2-1 キャリア・パスポートが目指すサイクル (12)

しかし、キャリア・パスポートは小学校から高等学校卒業までのポートフォリオであるがために、日常の記録の蓄積は不可能かつ効果的でないとし、「基礎資料を基に学年もしくは入学から卒業等の中・長期的な振り返りと見通しができる内容」(13) を残すものとしている。そのため、重要なサイクルを繰り返す頻度が少なくなり、かつその期間も長期的になりすぎることになり、児童生徒がキャリア・パスポートを上手く活用することは難しいように思われる。

また、実際に指導を行っていた経験から、児童生徒の記述が表面的な内容になっていることが多いと感じていた。それは、児童生徒の「自己を分析する力」や「目標を設定する力」を十分に育てられていないことに原因があると考える。そこでキャリア・パスポートに加え、それを補助し、より有効的に非認知能力を高める手立てとして「ログコンパス」の活用を提案する。

(2) ログコンパス

ログコンパスは、「長期ログ」「中期ログ」「短期ログ」の3つから構成されている。

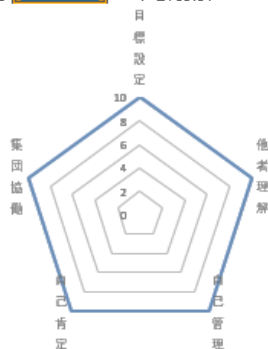
① 長期ログ

「長期ログ」は、キャリア・パスポートの記述を補助するもので、非認知能力の視点をもって1年間の目標設定と振り返りを行うものである (図 2-2)。まず「能力チェック」を行い、自分自身の力を分析し、グラフ化する。

その結果をもとに、キャリア・パスポートの「今の自分について (自己理解)」と「こんな自分になる (目標設定)」に記入、または追記をさせる。さらに、この1年で成長させたい力を一覧表 (図 2-3) から五つ選ばせ、年間の目標として設定させる。そして、現段階での力を10段階で自己評価させ、今後の決意を記入させる。

1. 能力チェックを行い、自分自身の力を分析してみよう

① 「能力チェック」に答えよう。



5つの項目はどんな力??

- 自己肯定**: 現状に満足せず、新しいものや自分に必要なものに興味をもち、目標として設定できる
- 他者理解**: ほかの人の考えを理解しようとし、人に優しくしたり、思いやりや共感をもったりできる
- 自己管理**: 目標に向けた計画を立て、まじめに努力を続けたり、責任感をもって取り組んだりできる
- 自己肯定**: 自分に自信をもち、周りからのストレスやプレッシャーに左右されずに行動できる
- 集団協働**: 外の世界やほかの人と積極的に交流し、取組を上手に進めることができる

○ 診断テストを参考にして、キャリアパスポートの「自分はこんな人」に追記してみましょう

○ 「自分の将来のイメージ」にも、より具体的な姿を追記してみましょう

2. この1年で成長させたい力

① 特につけたい能力を別紙から5つ選び、右の表に書き込みましょう。
※下からコピーもできるよ

能力名					
自己評価					

② 今の自分の力はどれくらいか、10点満点で右の表に書き込みましょう。

③ これらの力をつけるためには、どのような行動をとるべきか、自分の決意を書こう。

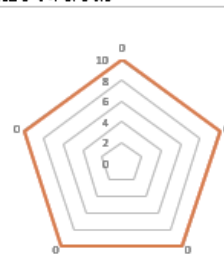


図 2-2 ログコンパス～長期ログ～の入力欄

年度末には、もう一度「能力チェック」を行い、グラフを用いて視覚的に変化を感じ取らせ、自己の変容を理解し、より深い振り返りができるように促す。

「能力チェック」は、全国学力・学習状況調査の質問紙を参考に、要となる非認知能力に関する質問をいくつかの視点から設定し、個々人に6段階で自己評価させるものを作成した(表2-1)。そしてその答えた数値から、第1章第3節で述べた五つの「目標行動」を点数化し、グラフで表している。

つけたい能力一覧表

※ 自分の目標に合わせて、つけたい能力を選ぼう。

	能力名	意味
目標を設定する	自己理解力	自分の得意なこと、苦手なことがわかる力
	改善力	振り返りや周りの人のアドバイスから自分を見直し、よりよくする力
	挑戦力	難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦しようとする力
	探求力	新しいものに様々な疑問をもち、もっと知りたいと思う力
自己を管理する	計画力	問題解決に向け、何が必要か考え、計画を立てる力
	忍耐力	目標を達成するために、つらいことも粘り強くやり続ける力
	集中力	周りからの誘惑に左右されず、集中して取り組む力
	道徳力	善悪を判断し、善いことを行おうとする力
他者を	共感力	周りの人の気持ちを考え、自分のことのように感じる力
	肯定力	自分と違う意見を前向きに受け止める力

図2-3 つけたい能力一覧表(一部抜粋)

表2-1 能力チェック【関係する要となる非認知能力】

次の質問は、あなたにどれくらい当てはまりますか。1~6の数字で答えなさい。

1:全く当てはまらない 2:当てはまらない 3:どちらかという当てはまらない
4:どちらかという当てはまる 5:当てはまる 6:すごく当てはまる

①. 難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している	【主体性】
2. 新しいものに出会ったときに様々な疑問をもち、もっと知りたいと思う	【主体性】
3. 自分の得意なこと、苦手なことがわかる	【自己分析力】
4. 振り返りや周りの人のアドバイスから、自分の行動を素直に見直し、よりよくできる	【自己分析力】
5. 周りの人の気持ちを考え、自分のことのように感じることができる	【共感性】
⑥. 自分と違う意見について考えるのは楽しい	【共感性】
7. 当たり前のことにも「ありがとう」と思い、感謝している	【感謝】
8. 相手を「すごい」と思い、自分も真似しようとしている	【尊敬】
⑨. 家で自分で計画を立てて勉強をしている(学校の授業の予習や復習を含む)	【忍耐力】
10. 自分の夢や目標の達成に向けて、計画を立てて取り組んでいる	【忍耐力】
11. 目標を達成するために、つらいことも粘り強くやり続けることができる	【忍耐力】
12. 周りからの誘惑に左右されず、集中して取り組める	【自己制御力】
⑬. 人が困っているときは、進んで助けている	【自己制御力】
14. 気持ちが落ち込んだときでも、ポジティブに考えられる	【自尊意識】
15. 自分の体や心を大切にし、健康に気がつかっている	【自尊意識】
⑯. 学校の授業で、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる	【自己決定力】
17. 毎日の生活の中で、自分でできることは自分でしている	【自己決定力】
⑱. 自分でやると決めたことは、最後までやり遂げるようにしている	【自己決定力】
⑲. 自分の考えを発表するとき、自分の考えがうまく伝わるように工夫している	【社交力】
20. 相手の話を最後まで注意深く聞いている	【社交力】
21. グループ活動や行事のときに、自分の役割を理解し、やりきろうとしている	【公共性】
22. 周りの人に合わせて、自分の意見や行動を変えることができる	【公共性】

※○のついた質問は全国学力・学習状況調査の質問紙より引用

また、能力チェックの質問項目に合わせて、それぞれに能力名を付けて一覧表にしている（図 2-3）。第1章では、五つの「目標行動」に必要な「要となる非認知能力」を設定したが、ここでは児童生徒が理解し、なりたいたい自分に合わせた能力を選択できるように、より具体的な能力を示している。これにより、児童生徒が「目標行動」ができるようになるためには、何を意識すればよいのかが明確になると考える。そして、児童生徒自身が高める能力を自己決定し、日常生活の中でその力を意識することで、非認知能力を育むことができると考える。

② 中期ログ

長期ログだけでは、振り返りの機会が年度内に1回となり、NDCが機能しているとはいえない。そこで「中期ログ」で、各行事や総合的な学習の時間においてNDCを取り入れる。各行事等で、クラスの目標をつくるのがよくあるが、それだけではなく、個人の非認知能力に関する目標を設定させ、振り返りを行う。

活動	体育祭	学習発表会	総合学習	学年
活動の目標				学年
自己成長の目標	→			
特に注目する能力				
振り返り				

他者評価										
記入者										
挑戦力										
探求力										
自己理解力										
改善力										
共感力										
自己評価										
つけたい力	点数	点数	コメント	点数	コメント	点数	コメント	点数	コメント	点数
挑戦力										
探求力										
自己理解力										
改善力										
共感力										
教師チェック欄										

図 2-4 ログコンパス～中期ログ～の入力欄

特に、長期ログで設定した五つの能力については、継続的に自己評価を行い、意識を高めていく。

図 2-4 のように、これらを一つの Excel シートに並べることで、行事等の価値がその行事内に留まるのではなく、他の行事等につながり、継続的に自己を成長させる取組であることが理解できるように促している。そして、自己評価をグラフ化し、視覚的にも見やすくすることで、年間を通しての成長を感じ取りやすくしている（図 2-5）。

またこの中で、他者評価を加える。行事等での活動の前に、クラスの中でバディとなる相手をつくり、バディの高めたい非認知能力を知った上で、取組期間の様子を見届け、評価させるのである。こうすることで、自分だけの偏った見方にならず、能力の向上に対する意欲が一層高まると考える。さらには、教師からのフィードバックも書き残していくことで、児童生徒の自己有用感も育むことができるのである。

今年度高める力はこれだ！！

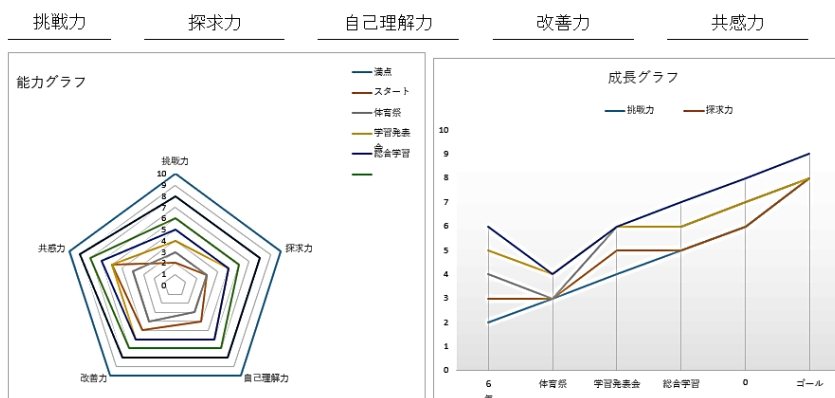


図 2-5 ログコンパス～中期ログ～のグラフ例

③ 短期ログ

さらに細かくNDCを繰り返すために、何気なく過ごしている日々の生活の中で「短期ログ」に取り組む。これは、長期ログ、中期ログのように「〇〇力」に注目するのではなく、NDCを習慣的に行動化することに価値があると考え、日常の行動に着目していく。

まず、児童生徒に1週間の具体目標を設定させる。これは「テストで90点を取る」などの結果を目標にするものではなく、「(90点を取るために、) 毎日30分自主学習を行う」など、結果に結びつく過程において、自身の具体的な行動を目標として設定させるものである。そして、1週間チェックを続け、その結果をもとに振り返りを行い、次の週の目標を設定させる。この際に、同じ目標を繰り返すのではなく、具体的な数値を調整させたり、別の視点で考えさせたりと常に自身の力が高まるように意識させることが重要である。

この流れをサイクルとしてつなげるため、図2-6のように1枚のシートにまとめた。実施については週に1度、振り返りと目標設定の時間を確保し、チェック表は毎朝の習慣とさせることを基本としている。ただ、各校の実態や既に行っている取組に合わせ、柔軟な方法で取り組んでいく。

図 2-6 ログコンパス～短期ログ～の記入欄（一部抜粋）

(3) 教師の働きかけ

ログコンパスに取り組むだけで非認知能力を育むことは難しい。第1章でも述べたように、NDCを上手く循環させるためには、教師の働きかけが重要となってくるが、どのような働きかけがよいのであろうか。既にその感覚をもっている教師は多く、無意識に適切な働きかけを行うことができるかもしれないが、ここでは「ARCS動機付けモデル」に注目し、意識的な働きかけについて述べる。

「ARCS動機付けモデル」とは、ジョン・ケラーが提唱した学習意欲向上のための動機付けモデルである。これは、学習意欲を「注意(Attention)、関連性(Relevance)、自信(Confidence)、満足感(Satisfaction)の4側面」で捉えたものである(14)。内容を以下のように簡易にまとめた(図2-7)。

- 注意：学習者の興味関心を引き、「面白そう」と思わせる
- 関連性：学習の目標に対して親しみをもたせ、「やりがいがある」と思わせる
- 自信：ゴールを明示し、成功の機会を与え、「やればできる」と思わせる
- 満足感：目標に到達した学習者をほめて認め、「やってよかった」と思わせる

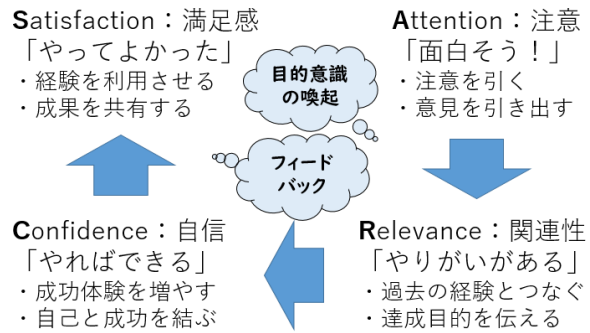


図 2-7 ARCS 動機づけモデル

この動機付けモデルは、教科等の学習だけでなく、特別活動や総合的な学習の時間にも当てはめることができ、ログコンパスをより有効に活用することができる考え方である。児童生徒の発達段階やクラスの状態に合わせ、ARCSのどの段階の言葉が必要なのかを判断し、働きかけることで、児童生徒の意欲を向上させることができる。特に、目標設定やフィードバックを行う際にARCSを意識することで、NDCがスパイラルとなり、非認知能力をらせん状に高めていくことができると考える。

第2節 実践校における取組

本市の学校で先述した「ログコンパス」の取組を実践する。今年度の研究協力校は、どの学校も各学年3クラス程度の中規模校で、小学校、中学校、小中一貫の義務教育学校の3校である。それぞれ「長期ログ」と「中期ログ」の取組を第1節で述べたように行い、「短期ログ」については各校の実態に応じて、取組内容を調節して行うこととする。

(1) A小学校での実践方法

A小学校では、第6学年の1クラスで実践を行う。学校教育目標の目指す子ども像には、「見通しをもちながら粘り強く学ぶ子」や「お互いのよさを認め合い、仲間と共に高め合おうとする子」などを掲げており、図1-1にある「遂行準備力」や「忍耐力」、「思いやり」、「社交性」といった非認知能力を高めようとしていると読み取ることができる。

独自の活動として、朝8:30からSATOタイムを設定し、朝読書や朝学習などを行っていた。そこで、火曜日のSATOタイムで「短期ログ」を取り入れる。火曜日に振り返りと目標設定を行うことで、徐々に目標への意識が高まっていく週の後半と、意識の薄まる週の初めの両方をチェックすることができ、自分自身の力になっているかをより確かに振り返ることができる。

また実践を行う6年2組では、朝の会で日直が学級の今日の目標を設定し、帰りの会でその振り返りを行う活動を取り入れていた。この活動は、学級としてNDCを行う場面となるため、目標をホワイトボードに書かせて強調し、振り返りをグループで行うことで一人一人に考えをもたせるように改善していく。また、その振り返りを担任がコメントし、フィードバックしていくことで、学級としてもよりよい方向に導くことができ、自分自身の短期ログの進め方や評価を調整する機会にできると考える。

(2) B中学校での実践方法

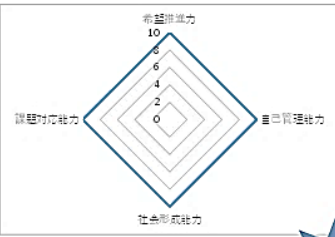
B中学校では、全校で実践を行う。学校教育目標の今年度の重点である「資質・能力の育成」では、「協働的に活動する力（主体性と社会性）の育成」や「規範意識の育成（自ら律する力の育成）」などを掲げており、図1-1にある「主体性」や「社会性」、「規範意識」、「自己管理能力」といった非認知能力を高めようとしていると読み取ることができる。

B中学校では、多くの学校で行われている朝読書の時間の一部を利用して「短期ログ」に取り組む。A小学校と同様に週をまたぎ、木曜日の朝の時間に取り組む。B中学校では、全校で取組を行うメリットを生かし、生徒が毎朝通る昇降口に、「短期ログ」についての掲示板を作成する。よい目標やよい振り返りを紹介することで、互いに意識を高める取組になることを期待する。また、中期ログのフィードバックにおいて、各教員の様々な書き方を比べながら、有効なものを見いだしていく。

(3) C小中学校での実践方法

C小中学校では、第5学年、第7学年の2学年で実践を行う。学校教育目標の目指す子どもの姿では、9年間を通して育むキャリアの力として「夢や希望を抱き、なりたい自分になろうとする力（希望推進力）」や「見通しをもって計画し行動する力（自己管理能力）」などを掲げており、図1-1にある「主体性」や「自己管理能力」、「計画力」、「実行力」といった非認知能力を高めようとしていると読み取ることができる。

① **能力マップ** に答えよう。



9年間を通して育むキャリアの力とは？

- 希望推進力** : 夢や希望をもち、なりたい自分になろうとする力
- 自己管理能力** : 見通しをもって計画し行動する力
- 社会形成能力** : 自分の気持ちや立場を理解し、周りの人とつながる力
- 課題対応能力** : 自分で課題を発見し、粘り強く立ち向かう力

○診断テストを参考にして、キャリアパスポートの「自分はこの人」に書き記してみよう

○「自分の将来のイメージ」にも、より具体的な姿を書き記してみよう

2. この1年で成長したいこと

- ① 身につけたい能力を別紙から5つ選び、右の表に書き込みましょう。
※下からコピーもできるよ
- ② 今の自分の力はどれくらいか、10点満点で右の表に書き込みましょう。
- ③ これらの力をつけるためには、どのような行動をとるべきか、自分の決意を書こう。

能力名	自己評価	自己評価	自己評価	自己評価

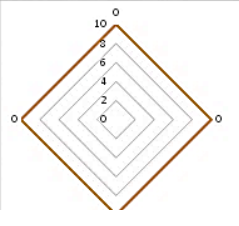


図2-8 C小中版ログコンパス～長期ログ～

C小中学校では、9年間を通して育むキャリアの力を高めるために、意図的に独自の取組を行い、児童生徒の意識を高めようとしている。そこで、本研究のログコンパスをそのまま実践するのではなく、C小中学校に合わせた形で実践できるようにアレンジした。第1章で設定した五つの「必要な力」を、C小中学校が定義する「希望推進力」「自己管理能力」「社会形成能力」「課題対応能力」の四つのキャリアの力に設定し直し、それと特に関連性の強い「要となる非認知能力」を選び直したのである。そのため、ログコンパスの長期ログの形式や付けたい能力一覧表を変更して実施した(図2-8)。また、第5学年での実施は、児童の理解力などを考慮し、選択する能力を減らしたり、文字だけで児童が抵抗感を抱くものにならないように付けたい能力一覧表をデザインし直したりした(図2-9)。

C小中学校では、独自の活動として、「C校コンパス」に取り組んでいる。「C校コンパス」は、個人の予定表のようなもので、1週間の授業予定を書き込み、自分の生活リズムを記録し、家庭での学習計画を立てるものである。時間割と提出物を記入することで忘れ物が減り、家庭学習の予定を立てることで計画を立てる力を高めることをねらいとしている。そこで、ここでも「短期ログ」をそのまま使用するのではなく、「C校コンパス」の中にその考え方を組み込んで実践していく。図2-10のように、既定の書式を一部変更し、NDCが繰り返し行えるように改善した。また、めあての設定について、表2-2のように設定のポイントや具体例を示すことで、記述内容が

つけたい能力一覧表

※ 自分の目標に合わせて、つけたい能力を選ぼう

キャリアの力	能力名	意味
希望推進力 	プラス思考力	気持ちが落ち込んでも、ポジティブに考えられる力
	自立力	周りの人に任せるのではなく、自分自身でやろうとする力
	意思実行力	自分でやると決めたことは、最後までやり遂げる力
自己管理能力 	挑戦力	難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦しようとする力
	探究力	新しいものに様々な疑問をもち、もっと知りたいと思う力
	改善力	振り返りや周りの人のアドバイスから自分を見直し、よりよくする力
	計画力	問題解決に向け、何が必要か考え、計画を立てる力
	忍耐力	目標を達成するために、つらいことも粘り強くやり続ける力
社会形成能力 	感謝力	当たり前のことにも「ありがとう」と思い、感謝する力
	尊敬力	相手を「すごい」と思い、自分も真似しようとする力
	傾聴力	相手の話を最後まで注意深く聞く力
	公共力	自分の役割をみつけ、その役割をやりきる力
	発信力	自分の意見を積極的に発信する力
課題対応能力 	集中力	周りからの誘惑に左右されず、集中して取り組む力
	忍耐力	
	回復力	落ち込んだあとに、すぐ立ち直り、次に進もうとする力
	創造力	いろんな角度から物事を考え、新たなアイデアを生み出す力
	他者調整力	周りの人に合わせて、自分の意見や行動を変える力

図2-9 C小中学校第5学年版 付けたい能力一覧表

学習達成度 → 目標の達成度
 ◎よくできた ○できた △少しかつた ×全然できなかった

1週間コンパス	27日(土)	28日(日)	29日(月)	30日(火)	31日(水)	1日(木)	2日(金)
10			国算	理算	体国	外書	音体
20			社算	家算	理算	音算	算外
30			社算	家算	理算	音算	算外
40			社算	家算	理算	音算	算外
50			社算	家算	理算	音算	算外
60			社算	家算	理算	音算	算外
70			社算	家算	理算	音算	算外
80			社算	家算	理算	音算	算外
90			社算	家算	理算	音算	算外
100			社算	家算	理算	音算	算外

めあて: コンパスを何回かやる

振り返り: 1週間振り返り

図2-10 C校コンパス改善版(記入例)

より価値が高いものとなるように促す。

表 2-2 目標設定のポイント・具体例（児童生徒配布用）

ポ イ ン ト	☆	目標は基本的に毎週変える	→	より易しくするもよし！より難しくするもよし！ 全然違う目標にしてもよし！リベンジするもよし！
	☆	具体的な目標を	→	あいまいな目標はチェックのときに甘くなる。
	☆	結果の目標より過程の目標を	→	小テストで8点とるより、そのために5分勉強する。
	☆	自分にあった目標を	→	他人と競うものではない。自分の生活にあわせた目標にしよう。
	☆	ちょっとがんばってできる目標を	→	全部◎、×なら目標にする価値がない。
具 体 例		・朝読書（朝活動）を時間どおりに始める		・授業のベルが鳴る前に準備をして着席をする
		・すれ違った先生に必ず挨拶をする		・一日の授業の中で、5回以上挙手をする
		・クラスメイトのために何か1ついいことをする（「ありがとう」を言ってもらおう）		
		・家で30分間机に向かって勉強する（途中でスマホをさわらない）		など

第3節 実践の効果の見取り方

第1章でも述べたように、非認知能力の成長はわかりにくいものだが、以下のものを見取りの材料にしていく。

○能力チェック

第1節の(2)①で示した「能力チェック」の変化を見取る。このチェックは自己評価であるため、数値の大きさよりもその変化に大きな意味をもつ。そこで、取組を始める前の7月と取組が進んで一区切りとなる12月にチェックを行い、分析を行う。

○記述内容の変容

児童生徒が記入したものの変容を分析する。中期ログでは、特に能力に関する振り返りの内容がどのように変わっていくのか、他者評価におけるコメントがどのように変わっていくのかに注目する。そして教師の関わりにも着目し、どのようなフィードバックが児童生徒に響くのかを検証していく。

短期ログでも同様に記述内容の変容を分析する。特に、目標の内容が初期のものからどのように調整されたかに注目する。

○事後アンケート

ログコンパスに取り組んだ児童生徒にアンケートを取り、実際に感じたことや考えたことなどを調査する。また、教職員にもアンケートを取り、教職員目線で実際に感じたことなどを聞き出しながら、どのように児童生徒と関わったのかを把握する。

このような見取り方で、本研究の取組がどのような効果をもたらすのかを分析し、児童生徒の新時代に生きる資質・能力の育み方を検証していく。

(11) 文部科学省 HP『「キャリア・パスポート」の様式例と指導上の留意事項』

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/1419917.htm

(12) 国立教育政策研究所『キャリア・パスポート特別編1「キャリア・パスポートって何だろう？」』2018.5 p.3

(13) 同掲(11)

(14) 鈴木克明『教育メディア研究：「魅力ある教材」設計・開発の枠組みについて-ARCS 動機づけモデルを中心に-』1995 p53

第3章 ログコンパスの実践

第1節 長期ログの実践

(1) 長期ログとキャリア・パスポート

各研究協力校で長期ログの実践を行った。本来であれば、4月当初にキャリア・パスポートと同時に長期ログに取り組むことが望ましいが、本実践の開始時期に合わせて7月に行った。各校の実施形態は様々であったが、取組の導入に時間をかけ、パワーポイントを使って児童生徒の興味を引いたり、問いかけを増やして近くの児童生徒と話し合わせたりと、この取組を行う必要性が伝わるように動機付けを行った。

また、キャリア・パスポートに追記するという形で自己分析と年間の目標設定を見直すよう促した(図3-1)。C小中学校では、5年生で35%の児童が、7年生では37%の生徒が追記できない、もしくは同じような内容の追記になっていたが、それ以外の児童生徒は能力チェックなどの影響もあり、自分を見つめ直せたり、自分に必要な目標が加えられたりしていた。例えば図3-2の生徒の記述例では、自分の長所に「字がきれい、やさしい」と書かれていたが「計画して行動できる、夢や目標をもっている」と非認知能力に関わる追記がされている。他にも、1年後の目標に「漢字を覚えて使える中学生になりたい」と書いていた児童が「自分のことだけでなく他の人のことも考えられるようにしたい」と新たな視点で追記していたり、「保育士になりたい」と将来の夢を書いていた生徒が、「夢をかなえるために、もっとコミュニケーションをとったり、積極的に発表や行動したりする力をつけたい」と夢を実現するために必要となる具体的な能力について追記していたりした。



図3-1 キャリア・パスポートへの追記

7年生 わたし 記入日 令和5年 7月 14日

○今の自分について考えてみましょう。

追記

自分の長所(自分の持ち味)
 1. 字がきれい 2. やさしい 3. すぐ行動できる
 4. 計画して行動できる 5. 夢や目標をもっている

気になること・夢中になっていること
 ・本を読むこと
 ・ニュースを見ること
 ・絵をかくこと
 ・音楽を聞くこと

座右の銘・志
 他の人にアキラ、自分にアキラ
 自分にアキラけないことは絶対ない。

自分の将来のイメージ(やってみたいこと・やってみたい仕事・憧れている人)
 文を長く書くことができるので、色々な物語を書く作家になつてみたい。

○1年間で、こんな自分になります!!

1年後のなりたい自分!!
 部活と勉強のどちらもがんばれている自立のとれた自分になりたい。

追記
 大変なこと、苦しいことがあっても、めげずにがんばれる自分

そのために
 テスト前以外も予習・復習をする。
 やるべきことは期限までに終わらせる。
 部活も勉強も一生けん命と取り組む。

図3-2 キャリア・パスポートの記述例

(2) 児童生徒の反応

12月に事後アンケートを行い、各ログに対する児童生徒の反応を調査した。長期ログに関連して、「自分で選んだ五つのつけたい能力は覚えていたか」「キャリア・パスポートに書いた目標を覚えていたか」と質問すると、表3-1のような結果が出た。若干ではあるが自己の目標を覚えている児童生徒が増え、ログコンパスに取り組むことで目標を思い出す機会が増えたと分析でき、児童生徒の「何気ない経験」を、目標を意識した「価値ある経験」へと導くことができていると考える。アンケート調査の記述の中でも、「学校行事に取り組むときに、目標を思い出した」「短期ログをする中で目標を思い出すし、自分が成長したなど感じる」という声があり、ログコンパスのねらいを実感させられたように思う。

表3-1 事後アンケート「〇〇について覚えていたか」(A校、B校、C校計384名)

	覚えていた	ときどき思い出した	覚えていない
長期ログで目標にした能力	16.1 %	35.7 %	48.2 %
キャリア・パスポートの目標	11.2 %	35.4 %	52.9 %

また、「長期ログに取り組むことは、自分にとって意味のあることであったか」という問いには、81%の児童生徒が肯定的な回答であり、児童生徒の達成感が高いことが示されている。中には、「自分の行いや経験を振り返るきっかけとなった」「自分で決めたからには目標を達成しないといけないという責任を感じた」「自分ができていないことがわかったので、自分ががんばりたいところを意識できるようにな

った」「長期ログをしないと自分から癖を変えようと思わないから、この取組によって成長できた」と前向きな効果を実感している児童生徒もいた。19%の否定的な回答の中には、「あまりやろうと思わなかった」「結局すぐ目標を忘れる」という意見もあり、動機付けの重要性を再確認させられた。

(3) 能力チェックの分析

長期ログの中で行った能力チェックについて、7月の結果を分析し、その妥当性を確かめた。それぞれの質問の中で、最も平均値が高かったのが感謝力に関するもので4.72、最も平均値が低かったのが計画力に関するもので3.54であった（数値は各児童生徒が1～6を選択する）。各学年の平均値については表3-2で示した。当然ながら各学校や各学年の実態が違うのでその結果には差が生じており、各学級や個人においてはなおさらであるが、全体の傾向として、上の学年の方が平均値は低くなっている。これは年齢が上がるにつれて非認知能力が下がることを表しているわけではなく、より多面的に自分の姿を見ることができるよう成長しているからだと思われる。実際、合計の平均値が最も低いB中学校の2年生は、比較的落ち着いた学校生活を送ることができており、学校行事等に積極的に取り組んでいる姿が見られた。他にも、第1章の表1-1で示したように、全国学力・学習状況調査の質問紙でも同じ質問に対する数値は、小学校より中学校の方が低くなっている。このことからこの能力チェックの妥当性を感じており、児童生徒の88%がこの能力チェックの結果が自分の感じている力をよく表していると回答した。

表3-2 7月の能力チェックの学年別結果（抜粋）：児童生徒が1～6で評価した平均値（A校、B校、C校計384名）

No	能力	C小5年	A小6年	C小6年	C中7年	B中1年	B中2年	B中3年	平均
7	感謝力	4.91	4.48	4.55	4.71	4.90	4.38	4.88	4.72
22	他者調整力	4.59	4.09	5.31	4.33	4.46	4.31	4.58	4.57
21	公共力	4.77	4.57	4.53	4.43	4.41	4.52	4.44	4.51
8	尊敬力	4.91	4.09	4.27	4.48	4.51	4.23	4.48	4.46
12	集中力	4.38	3.83	4.87	3.88	3.73	3.37	3.56	3.94
14	プラス思考力	4.05	3.78	3.94	3.77	3.77	3.22	3.50	3.85
1	挑戦力	4.21	4.09	3.91	3.81	3.79	3.37	3.83	3.84
9	計画力	4.20	3.35	4.55	3.62	3.29	2.64	3.13	3.54
	平均	4.49	4.15	4.56	4.16	4.16	3.80	4.12	4.21

7月の能力チェックの結果を研究協力校の先生方にも分析してもらった。上述のように多くの先生方が、学級の学力が高かったり、落ち着いて生活できていたりすると能力チェックの数値が低くなっていると述べていた。また学級ごとに数値を比べると、その数値が自身の感じていた学級の特色と一致していると述べ、結果に納得し、受け入れている先生が多かった。例えばある学級担任は、自分の学級の結果を見て「係や班に明確な役割をつくって注意しあっているため、公共力が高くなっている」「子どもに“すごい”とよく言っているので尊敬力が高くなっているのかも」と、結果とそれをもたらした指導を結び付けて納得されていた。また他の学級担任は、自分の学級に対して「受け身の子どもが多い」と以前から感じていたが、結果を見てみると、「他の学級と比べて、挑戦力や発信力が低い」とわかり、数値と自身の感覚が一致していることを感じられていた。やはり、この能力チェックは非認知能力をある程度の的確さで示すことができているといえるだろう。能力チェックを行う総数を増やし、その平均値と比較して自分の学級や学年を見ることで、教師として子どもたちのどのような力を伸ばしていくべきかを考える材料になるのではないだろうか。

最後に、第1章でも述べたように、能力チェックの数値や平均値だけに左右されるのではなく、その変化した数値やそう考えた理由に注目することで、非認知能力の変容を見取ることができる。第4章においては、12月に行った2回目の能力チェックと比較をしながら、更に考察していく。

第2節 中期ログの実践

ログコンパス(中期ログ)

(1) 中期ログへの記述

中期ログは、各校において取組の形態を変えて実践を行った。

B中学校では、原案に近い形で実践を行った。図3-3は2年生が入力した例で、2学期に行われた「文化祭」「体育祭」「チャレンジ体験」について、非認知能力の視点を取り入れた振り返りができている。自己評価のコメントには、「指揮やナレーターに立候補したことで計画力を上げられた」「体育委員として責任をもって活動できたので自立力が上がった」「責任をもって行動できていない点もあったなと思ったので自立力の点数を下げました」と残し、行事の感想ではなく、行事を通して成長した自分自身の力について振り返ることができている。コメントの内容をみると、能力を正しく理解できていないところもあるが、行事を通して自己を成長させようとする意欲が伝わり、NDC(図1-4)を循環させていることがわかる。このような姿勢こそが非認知能力を育てているのである。

また他者評価については、各学級の状態により学級裁量で行ってもらったため、様々な取り組み方が生まれた。その中で、タブレットをバディのところにもっていき、直接記入してもらおう方法が特に良いように感じた。児童生徒たちが直接顔を見合わせて打ち込むことで、文字だけでなく、その言葉の背景などを相手に伝えることができ、誤解なく受け入れてもらうことができていた。そして、直接顔を合わせることで、プラスのコメントが他の方法より多くなり、互いの自己肯定感が高まったように思える。

C小中学校の5年生は、各行事等にとどまらず、学期ごとの振り返りも中期ログのシートで行った(図3-4)。学期の振り返りを行うときに、自分が努力してきた足跡を見ることができることで、より具体的な振り返りが書けるようになり、また自分の選んだ五つの力を目にする機会が増えることになった点で、良い取り組み方であったと思われる。

活動	文化祭	体育祭	チャレンジ体験
活動の目標	声をだす。	クラスのみんと団結する	真面目に頑張る
自己成長の目標	人の気持ちをしっかり考えながら、てきぱきと自分のできることを積極		
特に注目する能力	挑戦力	忍耐力	肯定力
振り返り	大きな声を出してしっかりとナレーターすることができました。指揮も緊張などは気にせず、しっかりふれた。	クラスで団結して体育祭を行えた。どの競技も全力で出来たので良かったです。	一つ一つの行動に自信をもって行えた。しっかり指示を聞いてテキパキ動くことができた。

他者評価			
記入者	Aさん	Bさん	Cさん
改善力	7	6	7
忍耐力	7	8	8
自立力	7	8	8
計画力	7	7	8
道徳力	7	7	7
自己評価			
つけたいカ	点数	点数	点数
改善力	4	4	4
忍耐力	1	2	4
自立力	2	2	1
計画力	1	3	3
道徳力	2	2	4
教師チェック欄	何事も自分から動いて、やろうとすることは大切です！挑戦してみないと見えない景色もあります。	選手としてだけでなく、体育委員の役割も果たせたなら良かったです。	今回、できていないところがあったとしても、今後の学校生活でできるようになれば、それでいいですから、今後に期待しています！

図3-3 中期ログの入力例① B中学校2年生

図3-4は5年生が入力した例で、1学期末と2学期末の振り返りが書けるようになり、また自分の選んだ五つの力を目にする機会が増えることになった点で、良い取り組み方であったと思われる。

活動	1学期末	光と風1	運動会	文化祭	2学期末	3学期末	5年生
活動の目標		創造力を身につけるために色々な人の意見をとり入れる。	みんなで何事もあきらめずに一生懸命取り組む。	自分の最大限の力を発揮し、相手に歌を届けよう。	あきらめない、ポジティブなんでも全力で挑戦する。正しいことを選ぶようにする。喧嘩をしても仲がいいようにしたい。	5年生での行動や課題をやり切り、6年生に向かって前にすすむ。	
自己成長の目標		・なんでも頑張れる人になりたい・勉強をできるひとになりたい・ポジティブで色々なことを考えられるひとになりたい					
特に注目する能力		創造力	忍耐力	挑戦力	挑戦力	忍耐力	ゴール
振り返り	私はもうちょっとがんばったらできると思うからもうちょっと工夫して頑張りたい	自然災害のことを学習して救急救命のしかたや避難所での生活、災害があったときの正しい行動、AEDの使い方など災害のことをいっぱい知った。町探検に行ったときに、いっしょの備えなどがあつた。あつたところもあつた。マンホールや電線電柱のついでに自分たちの学校の備えがわかりやすくなると思った。	リレーでこけてもやり続けることをしたから忍耐力があつた。なぜなら準備をしたら、公共力があつた。なぜなら自分の役割を見つけてその役割をやりきれたから。	8年生がどのクラスも息があつていて、声があつて、すごいと思った。7、8年生が準備ができたこと、きれいなパフォーマンスがあつて、印象に残つていて嬉しかった。	あきらめずに、なんでも全力で挑戦できた。なぜなら宿題の直しをしていたし、文化祭や運動会でも本気でがんばつたし、発表の時に頑張つて原稿とかも書いていたから。		
自己評価							
つけたいカ	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数
挑戦力	6	7	6	7	7	6	
回復力	5	5	7	7	7	6	
忍耐力	4	6	6	6	6	6	
創造力	7	7	6	6	6	6	

図3-4 中期ログの入力例② C小中学校5年生

A小学校とC小中学校の7年生は、紙の振り返りシートと中期ログを併用して取り組んだ。A小学校では、図3-5のように、振り返りシートの中に、「自分の目標・こんな力をつけたい!」という欄をつくり、集団としての目標を掲げるだけの行事ではなく、個人として成長する行事になるよう促している。紙のシートのよさもいくつか考えられるが、図3-5のように毎回の目標や振り返り、教師からのコメントが簡単に記入できる点もその一つである。また持ち帰ることもできるため、保護者からコメントも容易にもらうことができる。やはり、多くの大人から個人に合ったコメントをすることは、その子に良い影響を与えるものだと感じた。タブレットでの中期ログと重複を避けるため、元の記入欄を全て書くことはなかったが、十分にその効果を得られたと考える。

学習発表会『絆・つながる、みんなのハーモニー』において

☆こんな発表会にしよう!!(全体の目標)ー気持ちは音色にのびる。

魅せよう!最高学年の姿届けよう!私たちの想い

それを受けて、自分の目標・こんな力をつけたい!

改善力 振り返りや周りの人のアドバイスから自分を見直し、よりよくする力

★半年までの日程、要約的日程

日付	自分の目標(どんなことを考えて、何を工夫して練習にのぞむのか。)	振り返り(全体や自分の成長、良かったこと、もう少しと思ったことなど)	先生から
10/30(月) 13日前		合唱は別のパートにつられたからかまはつた。合奏は小人数のたたくがすれんからたたくん。	スタンプ
10/31(火) 12日前	合唱でつられない	前よりは、自分のパートを歌えた。思うてもままだ。つられた。小さいこのライミックスは分かんない。みんながやることだから。	スタンプ
11/1(水) 11日前	大きい声で歌うことを意識する	大きい声で歌えたらつられたの違えうとしたけどできなかつた。	スタンプ
11/2(木)		(はじめはできていたけど)	スタンプ

自分のめあての改善力で、自分ができなかったところ、先生に言われたところを意識して、練習ができたからできていたと思う。

最初みんなてしたとき合ってたし、たりしてバラバラだった。

おうちの方より
練習の成果がしっかりと演出された。とても感動しました。
当日、1年生から全部の学年の演奏を聞いていましたが、合唱はやりの最高学年のハーモニーでした。だいに楽しんでくれた。何だか果てしなく楽しかった。みんながやることだから。

図3-5 A小学校の行事の振り返り(記述例)

(2) 特別活動(学校行事)と非認知能力



図3-6 各校の学校行事やその取組の様子

図3-6は各校の体育的行事と文化的行事、またその取組の様子である。これらの姿を見て、改めてこのような場で、非認知能力が育まれていると感じた。「目標を設定し、他者と協力しながら行事に取り組み、その結果に一喜一憂する」という流れが、NDCの循環の典型であり、間違いなく非認知能力の3つのカテゴリーに関する力を育成しているのである。しかし、ただ行事をこなすだけ、集団として活動を盛り上げるだけでは、必ずしも一人一人の力を育成することはできない。大切なポイントは以下の3点であると考えられる。

1点目は、行事への「動機付け」である。第2章でARCS動機付けモデルを紹介したように、その行事をやりたいと思えるように、児童生徒に働きかけることが大切である。そして、やる気になった児童生徒が「目標設定」をし、それに取り組めば、その後の活動の効果は確実に高められる。例えば、C小中学校の5年生では、学級目標を達成するためにその行事でどのような内容を、どの段階までで

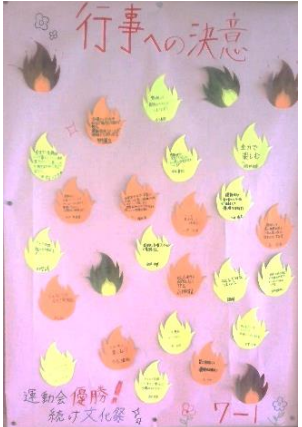


図3-7 動機付けの掲示

きるようにするのかを話し合ったり、A小学校の6年生では、行事を通してどのような学年をつくりたいのかをテーマに学年集会を開き、児童に意見を書き込ませ、話し合い、それをもとに学年目標を決定したりしていた。またC小中学校の7年生は、図3-7のように、一人一人の行事への想いを掲示物にして関心を集めたりもしていた。

2点目は、児童生徒の「居場所づくり」である。行事に向けた取組の中で、個々に役割を与えたり、児童生徒のつながりをつくったりすることで、自分の居場所があると感じ、その中で自分の役割を果たそうと前向きな「行動」に移していく。中期ログで提案している「他者評価」も、この居場所づくりの一つの取組であり、それによってより意識の高い「行動」が導かれている。各校の実践例を挙げると、C小中学校の合唱コンクールでは、パートリーダーが全体へのアドバイスボードを自分たちで作り、目標に向け何をすべきかを示している姿があった。また、全員の役割がくれなくても、図3-8のように一人一人が本番への決意を書き込み、当日に向けての学級全体の気持ちを整えることで居場所はつくることができていたように感じる。A小学校の運動会では、ダンスのキーパーソンや代表の言葉を話す人など、多くの児童に様々な活躍の場を意図的につくっていた。



図3-8 行事当日の黒板

3点目は、行事の「振り返り」である。振り返りをすることで、行事によって成長した力を確認でき、新たな自己の「現状理解」ができるからである。よって、振り返りの時間は、行事が終わり次第取り組んだ方が効果は高い。しかし実際には、ある程度時間が経ってからしか振り返りが行えない場合がある。そのときには、行事を映像で見直したり、学級通信などを配ったりすることで、行事の場面や気持ちを思い出させることができる。また振り返りがその場限りのものにならないように、図3-9のように掲示板等にその様子や高めた力を残すことも大切である。



図3-9 行事等の足跡の残し方

これらのポイントによって、主体性や自尊意識など、自分だけでは育みにくい非認知能力の育成を促すことができ、「集団を育てる行事」としてだけでなく、集団を通して「個々の力も育てる行事」にしていくことができるのである。

(3) 総合的な学習の時間と非認知能力



図3-10 各校の総合的な学習の時間の様子

図3-10は各校の総合的な学習の時間に、ポスター発表やグループ発表、調べ学習などを行っている様子である。学校行事と同じように、このような場面でも非認知能力が育まれていると強く感じ、前述の3つのポイントを意識して取り組むことで、よりよいNDCを生み出すことができると考える。加えて、総合的な学習の時間は行うことができる活動の幅が広いと、非認知能力の育成をより促すような活動内容を作り上げることができることもわかった。研究協力校で行われていた2つの事例を挙げる。

C小中学校の7年生は、「Grow up To Otona プロジェクト」と名付け、「素敵なオトナ」に成長するために必要なことを考えた。「はたらく」とは何かを調べたり体験したりする中で、最終的になりたい大人像とそのための行動目標を一人一人が掲げていた(図3-11)。例えばある生徒は、「途中で物事をあきらめられない大人になりたい」と目標を立て、「挑戦が失敗しても、何度も繰り返し挑戦する」と今からできることを考えた。長期



図3-11 Grow up To Otona プロジェクト

ログのように、少し先の「目標設定」とそのために必要な「行動」を考えられていた。今後、振り返りの時間を設けて新たな「現状理解」を行い、立てた行動目標を見直し、より具体的な行動にしていくことで非認知能力の育成を促すことにつながるだろう。

B中学校の2年生は、職場体験学習（京都市でいうチャレンジ体験学習）を通して、将来必要になる力を考えた。「働く上で必要だと思った力は何か」を自由記述で問うと、全体の92%の生徒が非認知能力を挙げていた。特に多かったのが忍耐力14人、協調力14人、挑戦力12人、他者調整力11人（72人中）であった。思考力や体力なども挙げたが、多く挙げた回答はどれもログコンパスに関わる、本研究で抽出した非認知能力であった。これは長期ログの導入やそれまでの中期ログ、短期ログの実践がうまく生徒たちに伝わっていたことを示しているともいえる。また活動を通して、非認知能力の必要性を学んだことで、各ログによりよい影響を与えるであろう。

また、図3-12のように体験の前後に「自分の能力（現状理解）」「自分の思い（目標設定）」を考え記録させ、それらを比較させたところ、ある生徒は自分の能力について、「話しかけるのが苦手」と書いていたが、体験を終えて「コミュニケーション能力を日頃から上げる努力をしていく」と、将来に向けやるべきことを決意していたようであった。それは、体験を通して学んだだけでなく、前後を比較した「振り返り」になっていたことも要因であると考えられる。

チャレンジ体験前	チャレンジ体験後
<p>自分の能力</p> <p>(こんなことが得意・好き、こんなことが苦 こんな能力をつけたいなど)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>周りをみて行動することが得意</u> ・<u>国家試験に興味がある</u> ・話しかけるのが苦手 	<p>自分の能力</p> <p>・<u>挑戦力</u> ↳ <u>姿勢として行動する力がちょっとづつついてきた</u> <i>good!</i></p> <p>・これから学んだことを生かしてコミュニケーション能力を日頃から上げる努力をしていく</p>
<p>自分の思い</p> <p>(将来はこんな生き方をしたい、こんな生 たい、こんな職業に就きたい、こんな風 い)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来は人の役に立てるようにしたい ↳ 医療関係とか ・人から信頼されるような人になりたい 	<p>自分の思い</p> <p>・将来は<u>コミュニケーションを積極的</u>にとして、信頼関係築けるような人になりたい</p> <p>・<u>周りの人と協力して自分の力を付けていきたい</u></p>

図3-12 チャレンジ体験の振り返りシート（記述例）

このように総合的な学習の時間においても、非認知能力を意図的に育成することが可能であり、活動の具体的な内容についてはまだまだ可能性が秘められていると感じた。

(4) 児童生徒の反応

長期ログと同様に事後アンケートで児童生徒の反応を確かめた。「各行事等で目標をもって取り組むことができたか」という問いに対し、全体の88%の児童生徒が肯定的な回答をした。その「目標」を分析すると図3-13のようになっており、集団として行事に取り組むことだけでなく、自分の非認知能力を伸ばすことに目を向けられている児童生徒が多いように思う。また、「各行事の後に、自分の非認知能力が高まったか」という問いには、全体の84%の児童生徒が肯定的な回答をしていて、「前よりも挑戦する機会が増えた」「以前と比べてできることが増えた」とコメントする児童生徒もおり、振り返りによって、個々に効果を自覚することができたように思う。

他者評価については、全体の90%の児童生徒が肯定的な回答

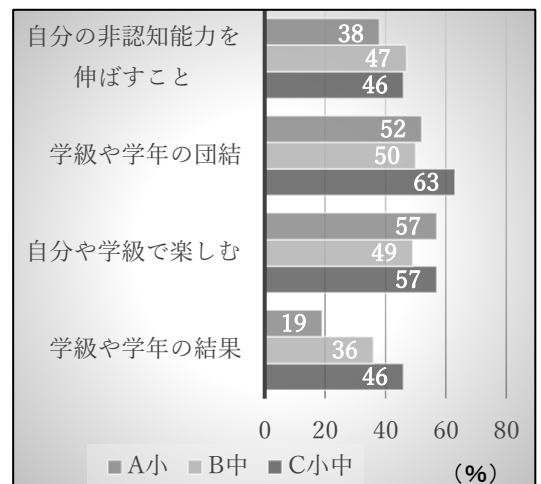


図3-13 どのような目標であったか（複数回答可）

をし、「他の人から、自分の良い所を見つけてもらえて嬉しかった」「自分だけではわからなかった自分の良い点や問題点がわかった」「自分以外にもがんばっていたことがわかった」と答える児童生徒もいた。「中期ログに取り組むことは、自分にとって意味のあることであったか」という問いには、82%の児童生徒が肯定的な回答であり、児童生徒の達成感が高いことが示されている。

最後に、「各目標行動に関する力がどのような場面や時間で高められるか」を児童生徒に質問したところ、表3-3のような結果となった。児童生徒の意識では、どの目標行動も「部活動・委員会（クラブ活動）」の回答が多かった。アンケートの対象として、中学生の割合が多いことも影響しているが、身近で自分たちが力を注いでいる場であると考え、その努力と非認知能力を結び付けた児童生徒が多いようだ。

「他者との協働」「情動の制御」に関する目標行動では「学校行事」の割合が多かった。本研究で着目している「学校行事」は、児童生徒の認識としても、非認知能力を育成できる場として捉えているようである。ただ「総合的な学習の時間」や「学活（朝の会・帰りの会）」と回答した割合は低かったため、中期ログや短期ログの取組が非認知能力を育成するという意図を実感させていく必要があると感じた。

「目標の達成」に関する目標行動では「教科の授業」の割合が多かった。本研究では、教科の授業での視点を考慮しなかったため、児童生徒がどのような授業場面で非認知能力が育つと考えているのかを調査し、非認知能力を育成する授業の提案を今後行っていきたい。

表 3-3 目標行動に関する力を育成する場面や時間（複数回答可、60%以上のものを太字）（A校、B校、C校計384名）

	目標設定	自己管理	他者理解	集団協働	自己管理
教科の授業	63.8	71.5	45.4	59.6	35.0
学活（朝の会・帰りの会）	10.8	12.3	18.5	26.5	13.8
総合的な学習の時間	51.5	43.5	47.7	56.9	34.2
道徳	36.9	23.1	79.2	50.4	26.2
部活動・委員会（クラブ活動）	65.4	63.1	65.0	68.5	80.0
学校行事	56.2	49.6	60.8	65.0	61.2
その他学校での時間	32.3	30.0	36.9	50.4	32.7
家庭での時間	49.6	58.8	39.2	37.7	34.2

％で表示

第3節 短期ログの実践

（1）短期ログの記述の変化

各研究協力校で短期ログの取組を行った。短期ログに書かれる目標は、個々の生活実態や学力、価値観などによって様々であった。図3-14は、B中学校2年生が記入した例で、自分の家庭での生活に注目して目標を設定している。最初は「24時までに寝る」ことを目標とし、「7時に起きる」「朝ご飯を食べる」「6時間以上寝る」と一貫性のある目標となっていた。取組開始時は意識が弱く、チェックも×になっていたことが多かったが、振り返りの中でしっかりと行動の見直しができおり、次第に目標を達成する日が増えていった。当初の計画（第2章）どおり、この目標自体は非認知能力の育成に直結するものでなくとも、短期ログへの取り組み方により、目標を立て、実行し、振り返るというNDCを習慣化することができており、非認知能力の育成に大きく貢献している。また図3-15は、A小学校6年生が記入した例で、「健康管理力をつけるために21:30までにお風呂に入って寝る」や「感謝力をつけるために1日5回以上ありがとうと言う」と自分の高めたい能力に合わせた目標を設定す

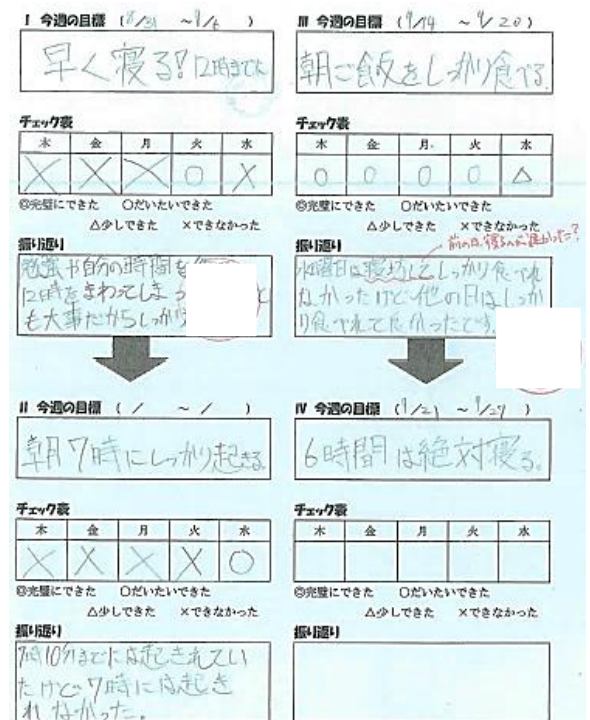


図 3-14 短期ログの記述例① B中学校2年生

ることができていた。このように習慣化だけでなく、目標を非認知能力の育成に直結させる児童生徒もおり、当初の予定よりも非認知能力を意識した取組にすることができていた。

短期ログを通して非認知能力を育成するためには、「具体的な目標」や「振り返りを踏まえた目標」が必要であると考え。A小学校での取組開始時は、ポイントを説明した直後でも児童が設定する目標は表3-4のような結果で、目標を設定することに慣れていないことがうかがえた。しかし実践を重ね、11月末には多くの児童が具体的な目標を書くことができ、先週の振り返り次第ではそれを改善した目標設定をしている児童も増えていた。これは、日々の学級担任の声かけや短期ログへのコメントなどが影響を与えているが、次の二つの取組がより大きな影響を与えたと考える。

表3-4 A小学校6年生の設定する目標の質の変化(%表示)

	9月初め	11月末
具体的な目標	44	86
振り返りを踏まえた目標	17	29

一つは「他者との交流の時間」である。A小学校ではSATOタイムを使い、個々に黙々と作業を進めるだけでなく、定期的に短期ログについて交流を行った。どのような目標を設定しているのか、どれくらい達成できているのかを伝え合うことで、よりよい目標の立て方を学んだり、振り返りと次の目標のつながりを感じたり、目標達成への意欲が高まったりと様々な効果があったと考える。

もう一つは「学級の週間目標の設定」である。A小学校の実践学級では、以前から朝の会で日直が学級の目標を設定し、帰りの会でその振り返りを伝える取組を行っていた。しかし、聞き流してしまう児童が多く、その目標が意識されないことが多かったため、火曜日の昼休みに班長会議を開き、学級の現状と課題を出し合い、週間目標を図3-16のように書いて教室内に張り出し共有することとした。これにより、学級の現状に合った目標を設定することができ、また多くの児童が主体的に目標達成に向けて関わることができ、学級としてのNDCをつくることができた。この取組が短期ログでのNDCにも影響を与え、良い取組へと促したと考える。

また、C小中学校では、昨年度の4月から「C校コンパス」を実施し、その中で目標設定と振り返りを取り入れていた。今年度の5月時点での5年生は、表3-5のようにどのような目標を立てるべきか迷っている児童もいた。8月末に学級担任から第2章の表2-2で示したポイントや具体例を説明し、丁寧に個々が書いた内容をチェックしたことで、児童もコツをつかみ、表3-5の数値が一気に上がった。

表3-5 C小中学校5年生の設定する目標の質の変化(%表示)

	5月初め	9月初め	11月末
目標設定できない	17	0	3
具体的な目標	32	66	58
振り返りを踏まえた目標	14	17	16

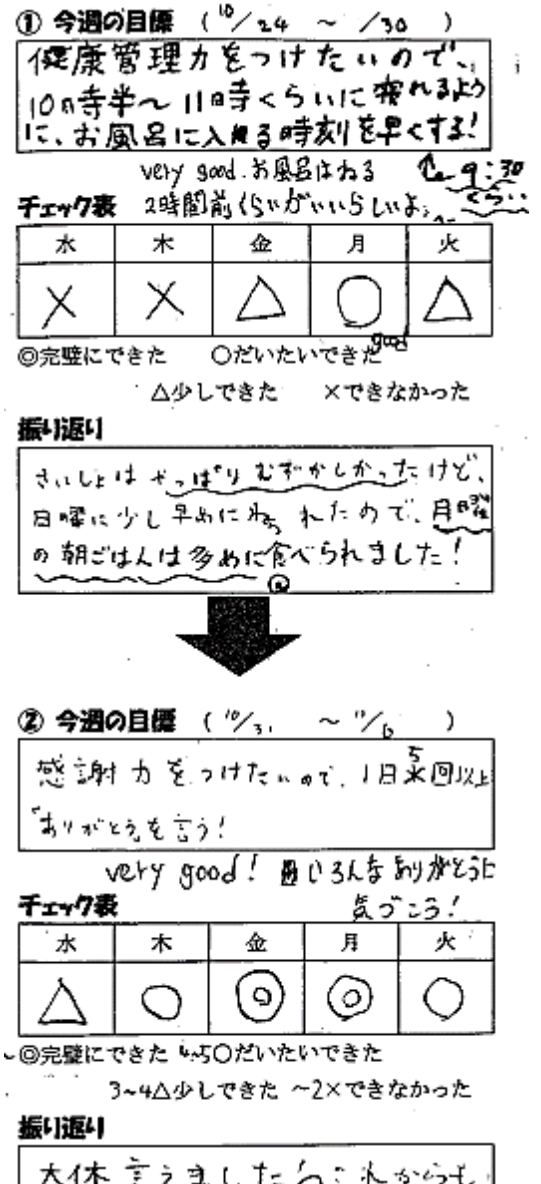


図3-15 短期ログの記述例②
A小学校6年生

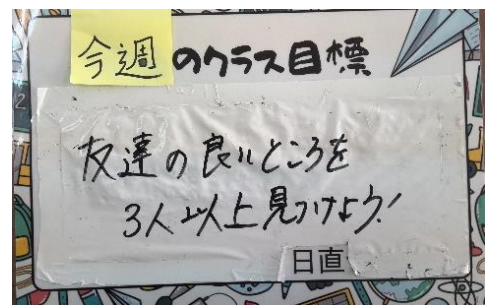


図3-16 今週の学級の目標

そのような実践を繰り返し行うことで、11月には学級担任がチェックをしなくても同じような数値を保てているのだと考える。またそれだけでなく、A小学校と同様に次の二つの取組がより大きな影響を与えたと考える。

一つは、「カテゴリ分け、掲示板の活用」である。C小中学校の5年生は、8月からの目標設定を生活面、学習面、能力面の三つのカテゴリに分け、学級の実態に合わせて目標の方向性を揃えていた。それにより、児童は目標が絞りやすく、友だちとも相談がしやすくなった。またそれぞれのカテゴリにおいて、良い目標設定と振り返りを図3-17のようにポスターとし、掲示板にて紹介した。これも、児童にとっては良い指針になったと考える。

もう一つは、A小学校と同様に、「学級の目標の設定」である。C小中学校では、評議員の取組として、「授業レベルアッププロジェクト」を行い、各児童生徒が授業に関する学級の現状を書き出し、評議員がそこから学級の目標をつくり、学級に共有、掲示をしていた(図3-18)。他にも5年生では、学級の問題点を各班で話し合い、その改善すべきテーマと具体的な行動目標を考え、掲示をしていた(図3-19)。どちらも学級としてのNDCをつくることができ、この取組が短期ログでのNDCにも影響を与え、良い取組へと促したと考える。



図3-17 短期ログ掲示ポスター



図3-18 学級の目標

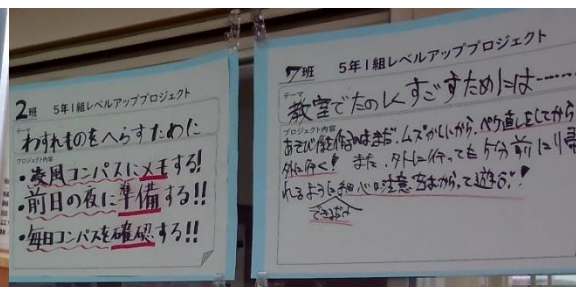


図3-19 学級レベルアッププロジェクト

(2) 児童生徒の反応

長期ログ、中期ログと同様に、事後アンケートで児童生徒の反応を確かめた。「自分で立てた目標を前向きに取り組むことができたか」という問いに対し、全体の78%の児童生徒が肯定的な回答をし、「目標を書くことでがんばろうと思えた」「1日ずつ前向きに取り組むことによって今までとは違う、新しい自分になることができる」「目標を達成するために今までの生活をふりかえることができた」という意見があった。また、(1)で述べた「振り返りを踏まえた目標」について、「その週の取組を振り返り、次の週の目標を立てることに活かしたか」と問うと、よく活かしたと答えたのが全体の30%、ときどき活かしたと答えたのが全体の49%で、その大切さを多くの児童生徒が理解できていたようだ。

さらに「短期ログによって自分の力を高めたか」という問いには、81%の児童生徒が肯定的な回答をし、この短期ログがきっかけで「英検3級に合格した」「行事を大成功させることができた」「家事の手伝い、早寝早起きが習慣になった」など、具体的な成果を挙げている児童生徒が多かった。このこともあり、「短期ログに取り組むことは、自分にとって意味のあることであったか」という問いには、82%の児童生徒が肯定的な回答であり、取組自体に対する児童生徒の達成感が高いことが示されている。

(3) 短期ログと非認知能力

短期ログの取組を進めるにつれて、児童生徒に“慣れ”が生じていくことを感じた。慣れによって、よりよい目標設定ができるようになる児童生徒もいれば、同じような目標が続き、短期ログに取り組む意欲が低くなる児童生徒もいた。そこで、図 3-20 のようなシートを使い、短期ログの目標の見直しを行った。これまで立てた目標がどの非認知能力と関連するのかを考えさせ、その力が身に付いているのを見つめさせた。

短期ログの目標の見直し

組 番 氏名 _____

～ 流れ ～

① これまでに立てた目標を見直し、関係あると感じた能力に「○」をつけましょう。

② ①で○をつけたものの中で、その能力が「ついたと感じるもの」に「◎」を、まだまだこれからだと感じるものに「△」をつけましょう。

③ 今後自分が伸ばしたいと思う能力に「☆」をつけましょう。(①と同じ能力でも違う能力でも大丈夫です。)

目標を設定する力	能力		意味		
	自己理解力	自分の得意なこと、苦手なことがわかる力	①	②	③
改善力	振り返りや周りの人のアドバイスから自分を見直し、よりよくなる力				
挑戦力	難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦しようとする力				
探求力	新しいものに様々な疑問をもち、もっと知りたいと思う力				
	計画力	問題解決に向け、何が必要かを考え、計画を立てる力			

図 3-20 短期ログの見直し

この見直しにより、「偏った目標ばかり立てていたのでは、次からはいろいろな視点で目標を立てる」や「単に〇〇するだけじゃなくて、〇〇するためにどんな力が必要かを考えて取り組みたい」とコメントする児童生徒もいて、何のために短期ログを行っているのかを再確認することができ、その後の短期ログの取組が意欲的になったと感じた。

この短期ログの見直しに用いた表を集計し、児童生徒がどのような内容の目標を設定しているのか、どの非認知能力を伸ばすことができているのかを次のようにまとめた。

まず、児童生徒に「自分で立てた 8 回分の目標と関連する非認知能力」を選択させたところ、表 3-6 のような結果となった（複数回答可とし、全体に対するその能力を選んだ人数を、割合で示した）。本節（1）の例でも示したように、健康管理力などは日常生活との関連が児童生徒でもわかりやすく、目標に設定しやすいことが数値としても示された。自己理解力や意思実行力については、直接関係する目標は少ないものの、短期ログをすることで自分の得意不得意や自分の性格を理解できた児童生徒や、自分の目標をやり切ろうとした児童生徒が多いようだ。逆に共感力や肯定力など、短期ログの目標とは関連しにくい非認知能力もあることがわかる。

さらに第 1 章第 3 節の図 1-3 で示した五つの目標行動に着目し、それぞれに関する力の平均値を求めた。すると、忍耐力などの「自己を管理する」が 43%、自尊意識などの「自己の価値を肯定する」が 42% と多くの児童生徒に選ばれており、逆に共感性などの「他者を理解する」が 15% の児童生徒にしか選ばれていないことがわかった。やはり、短期ログでは育みにくい分野であることが見いだされた。

また、「短期ログで今後伸ばしたい力」を選択させた結果を表 3-6 にまとめた（複数回答可）。短期ログに取り組む中で、今まで踏み出せなかった一歩が踏み出せたり（挑戦力）、自分で決めたことを最後までやり切ろうとすることができたり（意思実行力）、目標達成のために我慢することができたり（忍耐力）と、短期ログの長所をうまく活用しようとしている児童生徒が半数近くいると分析できる。この短い実践の期間の中でも、短期ログのよさを児童生徒が実感として感じ取ることができたのではないかと思う。ただやはり、共感力はこの項目でも最も低い割合となり、短期ログとの関連の難しさが明示された。

表 3-6 短期ログの目標と非認知能力（選ばれた割合が特に高い力や特に低い力を抜粋）（A 校、B 校、C 校計 384 名）

短期ログの目標と関連する力	健康管理力	計画力	忍耐力	自己理解力	意思実行力
	58%	57%	50%	50%	49%
	傾聴力	発信力	探求力	肯定力	共感力
	17%	15%	13%	12%	11%
短期ログで今後伸ばしたい力	挑戦力	意思実行力	忍耐力	他者調整力	共感力
	49%	44%	43%	20%	17%

このことから、短期ログは「自己を管理する」「自分の価値を肯定する」に関する力の育成を主なねらいとすることが効果的であるといえる。残りの目標行動については他のログの特性を生かし、中期ログで「集団の中で協働する」「他者を理解する」に関する力を、長期ログで「目標を設定する」に関する力を主なねらいとすることで、互いに補い合うことができると考える。各ログコンパスを使い分け、それぞれのよさを生かしてNDCを循環させていくことで、各カテゴリーや非認知能力全体の育成につなげることができるのである。

児童生徒アンケートで「今回取り組んだ長期ログ・中期ログ・短期ログは、非認知能力を育むために役立ったか」と問うと、「思う」の回答が48%、「やや思う」の回答が41%で、9割程度の児童生徒がこの取組に価値を感じてくれたようである。また先にも述べたように、それぞれのログに対して「取組が自分にとって意味のあることであったか」と問うと、どのログも8割以上の児童生徒が肯定的な回答をしている。否定的な回答をした児童生徒の中には、この取組をしなくても自身でNDCの循環ができている者や、逆にこの取組をしてもNDCの循環ができない者がいたようである。ただ、多くの児童生徒がこのログコンパスによってNDCの循環ができたことは、この研究の成果といえるであろう。第4章では、教職員の反応や能力チェックの変容も踏まえ、成果と課題を整理していく。

第4章 研究の成果と課題

第1節 教職員アンケートより

(1) 「非認知能力」の認識について

教職員に対してアンケート調査を行った。まず「非認知能力」に関連する項目から述べていく。「非認知能力に関する知識はあるか」という問いは、表4-1のように変化した。近年注目されている非認知能力とはいえ、深く理解していると答える現場の教職員はまだまだ少ないのが実態である。そのような状況のままでは、非認知能力を育成することは難しい。今年度は、実践前に研修会や学年会などで本研究の趣旨を説明した効果もあって、実践を行いながら非認知能力とは何かを感じ取ることができた教職員が多かったのではないだろうか。また、個々に興味をもち、自発的に知識を深めた教職員がいたことも大きい。

非認知能力の育成に関する質問では、表4-2のような結果になった。年度当初は75%の教職員が非認知能力の育成に関する意識をしていなかったが、この実践を経て教職員の意識が高まったことがわかる。そして、それは学級、学年などでの全体指導や一人一人の個別指導に偏ったものではなく、どの場面でも意識できるようになったことは、一つの成果といえるであろう。

表4-1 「非認知能力」に関する知識はあるか（1～4で回答：数値が高いと知識がある）

	1	2	3	4	平均値
年度当初	8人	10人	6人	0人	1.92
12月	0人	7人	16人	1人	2.75

表4-2 「非認知能力」の育成に対する意識（1～4で回答：数値が高いと意識が高い）

	平均値
年度当初：「非認知能力」を育成しようと意識しているか	1.92
12月：全体指導の中で「非認知能力」を育成しようと意識しているか	2.79
12月：個々の指導の中で「非認知能力」を育成しようと意識しているか	2.92

(2) 教職員から見た「ログコンパス」

次にログコンパスの取組に関連する項目について述べていく。児童生徒と同様に、各ログが「児童生徒にとってよい取組であったか」を質問したところ、長期ログは 38%、中期ログは 54%、短期ログは 71%の教職員が肯定的な回答をした。第 3 章で示したように、8 割以上の児童生徒が肯定的な捉えをしていたのにもかかわらず、教職員は取組の間隔が長くなるほど肯定的な回答が少ないという結果になった。

その原因を考察すると、一つの理由として「教職員の理解度」が挙げられる。短期ログは実施する回数が多くなるため、やりながらでも理解しやすいが、中期、長期となるにつれ、実施する回数が減り、そのよさを理解しにくいのではないだろうか。特に本年度の長期ログの実践は、研究員が授業を行い、各校の教職員がサポートを行ったため、理解度はそれ程高くなかったと思う。(1)で、非認知能力の認識について述べたが、この実践を深めていくためには、教職員の理解を更に深める必要があり、今後の大きな課題であると感じた。

もう一つの理由として「変容のわかりにくさ」が関係していると考える。実践の中で、短期ログは児童生徒の反応を毎日感じ取ることができ、毎週フィードバックを行うことで児童生徒を変容させやすい。しかし、長期ログはその変容がわかりにくいと、その有用性を感じにくいのではないかと考える。実際に各ログにおける児童生徒の変容を質問しても、長期ログに関する変容の姿はほとんど書かれなかった。また、教職員アンケートを実施した際には、長期ログの能力チェックの変化を共有することができなかったため、よりその価値を感じるのが難しかったのではないだろうか。

このことから「非認知能力」という見取りにくいものを育成する上で、その基準を作ることが重要であると考えられる。よって、能力チェックなどの数値化できるものを取り入れ、その変化を分析することが必要となってくるのである。本章第 2 節では、能力チェックの結果の変化をより細かく分析し、児童生徒の非認知能力を見取っていく。

(3) 教職員が見取った児童生徒の姿

教職員に「各ログによって児童生徒が変容した姿」を尋ねた。その一部を箇条書にして以下に示す。

【長期ログ】

- 発信力を目標にした生徒が次第に周りの生徒に声かけをするようになっていった。
- 意外な生徒がネガティブ思考だとわかった。ただ、取組を通して少しずつ自信をつけていることが文章や数値だけでなく、本人の発言から感じるが多かった。
- 年度当初と週末のレーダーグラフがあることで、一目で成長を感じていた。あくまで自己評価だが、中期ログなどで他者評価もあったため、説得力の増した評価ができていた。
- 各能力について理解できない生徒が多く、何のためにやっているかをわかっていないようだった。

【中期ログ】

- 絶対に目立ちたくないという生徒が、友だちや先生からポジティブな声をかけてもらうことで、表舞台でも活躍することができた。
- 年度当初に漠然と立てた目標が、様々な行事を通して振り返ることで、「あ！この力は確かについたぞ！」と見えない非認知能力を自覚していた。
- 他者評価によって、根拠や理由とともに友だちのよいところを見つけることができていた。
- 目標に設定した能力に、活動が伴わない場面があり、目標の達成が難しそうであった。
- 活動の振り返りと成長に関する振り返りの区別をするのが難しい生徒もいた。

【短期ログ】

- 実際に生徒の遅刻が減った。
- 発表の姿や予定帳への記入など、自身の行動を変えようとする姿が見られた。
- 「がんばってるね」と声をかけると、次の日からも意識して目標を達成しようとしていた。
- 育成学級の生徒は目標を考えるのが難しかったが、「何時に」「どんなことを」など、具体的に目標を設定できるようになっていった。

- 振り返りの結果を踏まえてステップアップしていく生徒と、同じことを繰り返すだけの生徒との差が目立った。
- 高い意識で継続して取り組むことが難しい生徒が多いように感じた。

【その他】

- クラス目標を毎週考えることでクラスがいい方向に進んだ。班の中で声かけをする姿や振り返りの際に「〇〇さんががんばっていた」「〇〇さん成長している」という声があって、周りを見る力が育っていくことを実感した。
- 普段の朝学活のときに、ログコンパスの内容が会話に出てきて、生徒の意識の高さを感じた。
- あまり考えて書いていない生徒も多く、意識した行動が見取れなかった。
- 成果が表れているかどうかの見取りが難しかった。
- それぞれのログのつながりが児童は理解できていなかった。

(○成果 ●課題 に関する内容)

最後の意見にもあるように各ログのつながりについて、「各ログのサイクルによって、児童生徒の非認知能力によい影響を与えたか」と質問したところ、58%の教職員が肯定的な意見であった。(2)で挙げた課題と重なる部分もあるが、各ログの「つながり」をもっと教職員に理解してもらうことも必要であった。第3章でも述べたように、ログコンパスはそれぞれのログが補いあって五つの目標行動(図1-3)を導く仕組みになっている。また長期ログで立てた目標が中期ログで使われているなど、ログコンパスの構成としてもつながりをもっている。指導者が理解をより確かなものにし、児童生徒にそのよさを感じ取らせることが今後の実践における課題といえる。

第2節 能力チェックの変容

(1) 学年ごとの変容の比較

本研究では、12月に長期ログの後半を行い、2回目の能力チェックを行った。本節では、その結果を分析し、1回目の能力チェックと比較し、その変容について考察する。表4-3は各学校、学年の能力チェックのデータを平均値で表したものである。また7月と12月の数値を比較し、その差を「成長度」として表した。そして、一人一人の2回のデータを比較し、12月の数値の方が高い児童生徒の人数の全体に占める割合を集団の「成長率」として表した。

表4-3 能力チェックの結果の変化(児童生徒が各能力を1~6で評価した平均値、比較した数値)

	A小 6年	C小 5年	C小 6年	C中 7年	B中 1年	B中 2年	B中 3年	計
児童生徒数(有効値のみ)【人】	20	58	67	53	78	64	63	403
7月平均	4.07	4.40	4.44	4.03	4.10	3.90	4.10	4.15
12月平均	4.47	4.50	4.55	4.31	4.46	4.36	4.40	4.44
成長度 全項目の平均値の上昇度	0.40	0.10	<u>0.11</u>	0.28	0.36	0.46	0.30	0.29
成長率【%】 合計値が上昇した児童生徒の割合	80.0	71.4	<u>59.9</u>	75.4	76.9	87.0	77.5	74.9

C小中学校の6年生には、能力チェックのみの協力を依頼した。つまり、C小6年についてはログコンパスの取組のない、一般的な学校生活の中で成長した数値なのである(表4-3下線部)。これを対照としてみると、C小5年の成長度以外はC小6年と比べて大きな変化となっており、ログコンパスによって、非認知能力が育成できたと読み取ることができる。例えば、B中2年はC小6年と比べ、成長度が

0.35も大きくなっており、一人一人の数値が平均して4倍以上も成長している。また、C小6年は学年の6割の児童しか数値が伸びていないが、他の学年は8割程度の児童生徒の数値が伸びているのである。この結果は、本実践の大きな成果を示しているといえる。

(2) 教職員の意識と児童生徒の成長

表4-3をより細かく分析すると、A小6年とB中2年が成長度、成長率のどちらにおいても成長が著しい。同じログコンパスに取り組んだ他の学年と何が違うのだろうか。その一つの答えは、教職員アンケートにあると考えた。表4-4は教職員アンケートの回答を数値で表したものである。「取組へのアプローチ度」とは、「中期ログの導入で、児童生徒に自己の能力を高めるように動機付けを行ったか」「短期ログを通して、児童生徒とコミュニケーションをとったか」など、ログコンパスを通して児童生徒と関わった度合いを4段階で答えてもらい、各学年の教職員集団の平均値を求めたものである。また「取組への満足度」とは、各ログに対して、「児童生徒にとってよい取組であったか」を4段階で答えてもらい、同様の平均値を求めたものである。

表 4-4 教職員アンケートより（教職員が質問項目に対し1～4で回答した平均値）

	A小 6年	C小 5年	C中 7年	B中 1年	B中 2年	B中 3年	計
教員数（有効値のみ）【人】	1	4	6	4	5	4	24
取組へのアプローチ度 ログコンパスを通じた児童生徒との関わり度	<u>3.50</u>	3.00	2.04	2.13	<u>3.25</u>	2.56	2.65
取組への満足度 ログコンパスの意味を感じた度合い	<u>4.00</u>	2.69	2.67	2.50	<u>2.90</u>	2.23	2.67

この表を見ると、先程取り上げたA小6年とB中2年が高い数値であることがわかる（表4-4下線部）。もちろんどの学年も協力的に実践が進められたが、この二つの学年では研究員からの提案だけでなく、研究協力員や学年教職員が立案し実践するほど前向きに取組を行っていた。例えば、B中学校の2年生は、総合的な学習の時間の取組で非認知能力と関連するような題材を学年で作成し、実践を行っていた。具体的には、第3章第2節(3)で紹介した職場体験学習の振り返りや、自分の理想の未来を描き、そのために必要なことを分析する「ステキな未来設計図」（図4-1）などが挙げられる。このような教職員の前向きな姿勢が児童生徒の非認知能力の育成につながったといえるだろう。

やはりNDCは、児童生徒だけの力でサイクルになるものではなく、指導者の適切なサポートによってサイクルとして機能するのである。

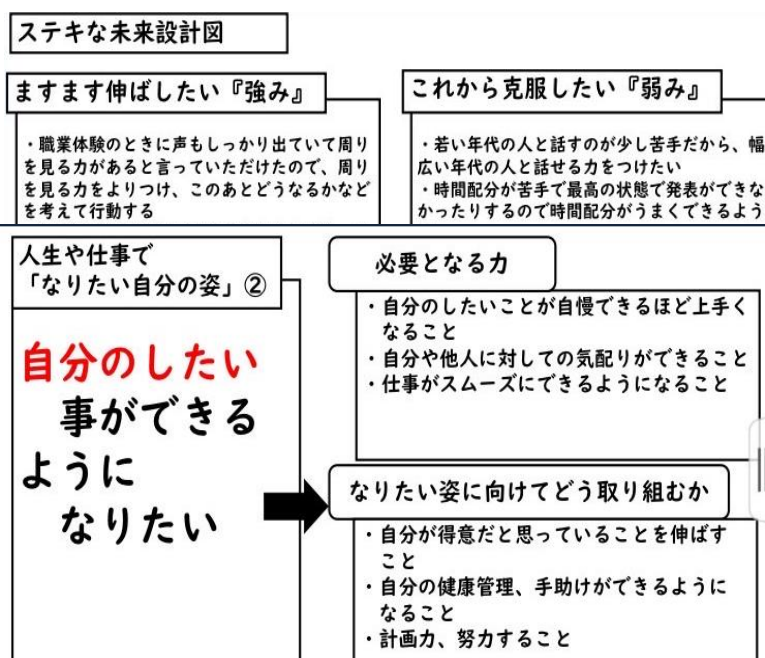


図 4-1 ステキな未来設計図の記入例（B 中学校 2年生）

(3) 全国調査からの変容

能力チェックは、全国学力・学習状況調査の質問紙を参考に作成している（第2章第1節(2)）。本

表 4-5 全国学力・学習状況調査質問紙の内容の継続調査結果（B中3年生の肯定的な回答をした生徒の割合）

B 中学校 3 年生	4 月 (質問紙)	7 月 (実践前)	12 月 (実践後)	4 月 京都市平均
①自分には、よいところがあると思いますか	71.3	62.3	77.0	76.9
②将来の夢や目標を持っていますか	64.4	65.6	83.6	65.2

実践では能力チェックに加え、質問紙で問われている「自分には、よいところがあると思いますか」「将来の夢や目標を持っていますか」を児童生徒に質問した。B中の3年生の結果をまとめると表4-5のように変化していた。

4月から7月の変化はそれぞれ①が－9ポイント、②が＋1.2ポイントであった。質問紙と能力チェックは実施人数等が異なるため、正確な変化を表したものとはいえないが、①は減少し、②は概ね変化なしとなった。しかし本実践を行った後には、どちらも7月と比べて15%近く増加している。改めて質問内容を分析すると、①の質問は「自己肯定感」に関する質問であり、②の質問は「目標の設定」に関する質問である。つまり、この結果からも非認知能力の一部が成長したと読み取ることができ、ログコンパスの取組を通して非認知能力が育成されたことが示されている。

また、B中学校3年生の2回の能力チェックを比較すると、その変化に①、②と同じ傾向が見られた。能力チェックは独自で作成したものではあるが、これらの結果から考察すると、ある程度の妥当性が示されていると考える。

（4）スキルがスキルを生む

本節で児童生徒の非認知能力が育成されたことを示したが、どの非認知能力が育成されたと児童生徒は捉えているのだろうか。能力チェックで抽出した20個の力の成長度を分析した。表4-6では、7月の長期ログにおいて、児童生徒が選んだ五つの「1年間で成長させたい力」の総数をまとめ、全体における割合を示した。また、能力チェックの結果からそれぞれの成長度（7月と12月の数値の差）の平均値を求めた。

7月の目標設定の時点では、児童生徒の選択に偏りが見られ、取り組みやすそうな「集中力」や「挑戦力」などの割合が高く、取り組みにくそうな「公共力」や「他者調整力」などの割合が低くなっていた。しかし成長度を見てみると、その選択者が少ないからといって成長度も低いというわけではない。例えば、「挑戦力」は53.6%の児童生徒が年間目標に選び、成長度も平均0.56と高いが、「改善力」は25.4%の児童生徒しか選んでいないのに、成長度は平均0.53と高い。短期ログでNDCを習慣化させた効果もあって、「改善力」などは児童生徒の選択とは関係なく成長したのかもしれない。

さらに、表4-6のデータを五つの目標行動（図1-3）に分けてまとめ、その割合を円グラフで表した（図4-2）。7月に選択したときには、「他者を理解

表 4-6 選択された目標と育成された非認知能力（284人中）

非認知能力		選択 【人】	選択 【%】	成長度
目標設定	自己理解力	51	18.0	0.24
	改善力	72	25.4	0.53
	挑戦力	152	53.6	0.56
	探求力	34	12.0	0.29
他者理解	計画力	124	43.7	0.53
	忍耐力	110	38.8	0.42
	集中力	170	59.9	0.44
	道徳力	37	13.0	0.27
自己管理	発信力	68	24.0	0.32
	傾聴力	29	10.2	0.35
	公共力	27	9.5	0.3
	他者調整力	23	8.1	0.27
自己肯定	共感力	50	17.6	0.31
	肯定力	45	15.9	0.22
	感謝力	67	23.6	0.35
	尊敬力	40	14.1	0.34
集団協働	プラス思考力	114	40.2	0.48
	健康管理力	52	18.3	0.37
	自立力	103	36.3	0.29
	意思実行力	51	18.0	0.38

する」が最も多く(31%)、「自己を管理する」が最も低くなっていた(10%)。12月に児童生徒が成長したと感じた目標行動は「他者を理解する」が最も多く(23%)、「自己の価値を肯定する」が最も低くなっていた(17%)。7月に選択した時点では最大で21%もの差があったが、12月に成長を感じたものは最大でも6%の差に縮まっている。

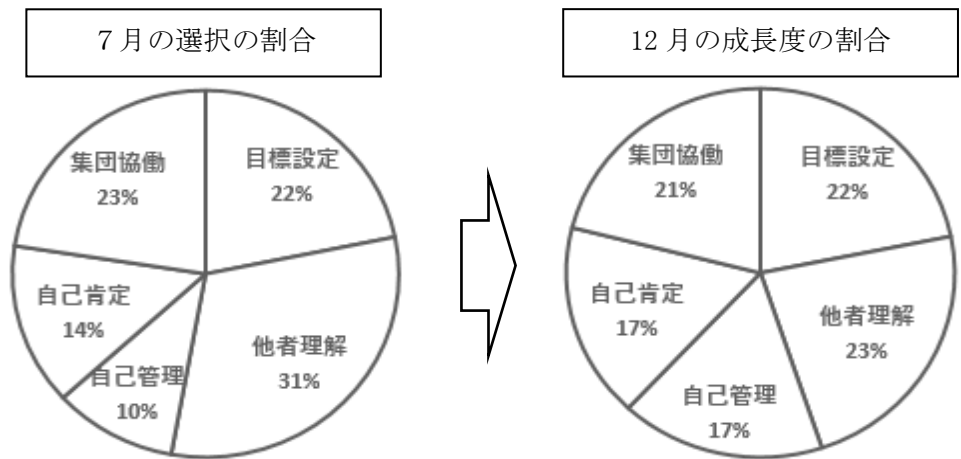


図4-2 目標行動ごとの割合の変容

つまり実践後は、選択したときほどの偏りがなくなり、どの目標行動に関する力も成長したと捉えられる。

この要因を考えたときに、「スキルはスキルを生む」(第1章第3節(1))というOECDの知見が連想された。あるタイプのスキルが他のスキルの育成を助けるという相互生産性について述べられており、そのエビデンスについても触れられている。本実践でも、ある非認知能力を育成したことが、その非認知能力だけでなく、他の非認知能力にも影響を与えたということが示されたため、正に「スキルがスキルを生んだ」といえるのではないだろうか。

これらのことから、非認知能力の育成にあたり、指導者が指定した特定の能力だけを高めることも一つの方法であるといえる。しかし、児童生徒自身がその能力の必要性を感じ、主体的に取り組むことができなければ、非認知能力全体の育成にはつながらない。そこで本研究のように、児童生徒が自ら高めたい非認知能力を選び、目標達成に向けて行動、振り返りを繰り返す方がより主体的な活動が可能となり、かつ非認知能力全体を育成することができるといえるだろう。また本研究で抽出した非認知能力は、先行き不透明なこれからの社会において特に必要とされる能力であるため、本研究のタイトルのとおり、ログコンパスの取組によって新時代に生きる資質・能力が育成できるといういいのではないだろうか。

第3節 まとめ

第2節までに、本研究の成果と課題を挙げてきた。今後、実践内容を改善しなければいけない点はいくつかあるが、全体として成果を残すことはできたのではないだろうか。最後に、児童生徒アンケートで「非認知能力はこれからの社会に必要なか」という質問をしたところ、「思う」が66%、「やや思う」が30%で、合わせて96%の児童生徒が非認知能力の必要性を感じていた。これからの新時代を生き抜くためには、「非認知能力」は欠かせないものとなっていく、その育成は必須となっていくだろう。本研究を各校の実践のきっかけにし、多くの教職員が非認知能力の育成を意図的に取り組んでいただければ幸いに思う。

本研究のまとめとして、児童生徒アンケートの中の自由コメントに考えさせられるものがいくつかあったため、その一部を紹介して、締めくくる。

- ・これからの未来で使える場面がたくさんあると思った。学力以外の力を身につけることで他の人との関わりが深まっていくと思った。(C小中学校5年)
- ・これからの社会には、自分を理解し、改善を続け、常に探求し続ける力が大切だと思った。
(A小学校6年)
- ・学力以外にも大切な力があり、それを発展させないと仕事につながらなくて、人間関係で社会が嫌になってしまう。(C小中学校7年)

- ・人としての礼儀や遅刻しないなど当たり前のことを改めて見返して、その重要さを感じた。自分で意識することは大切だなと思った。(B中学校2年)
- ・学力以外の力は人と関わることを通して身につく。しかし、周りの環境によって自分は良いようにも悪いようにも変わってしまう。特に自分の感じていることと周りの感じていることの間ギャップがあると自分に自信がなくなり、挑戦を恐れることにつながる。そんな中で自信をつけていくには、自分が達成したいと思う目標に出会い、周りを気にする暇もないくらい打ち込むと、自分の力を伸ばすことに直結すると考えた。(B中学校3年)

このような考え方ができる児童生徒がこれからの新時代を切り拓いていってくれるであろう。

おわりに

近年注目を集めている非認知能力は、旬なテーマとして取り扱われているだけのものなのだろうか。今言う非認知能力を含む概念として「生きる力(1996年文部科学省)」や「人間力(2003年内閣府)」、「社会人基礎力(2006年経済産業省)」などがこれもでも掲げられてきたが、これらの言葉を耳にする機会は少なくなっている。しかしその言葉がなくなっても、核となる部分は引き継がれ、次の時代へとつながっている。「非認知能力」という言葉が、20年後も使われているかはわからないが、その核となる部分は今後の教育の中でも大切にされていこう。非認知能力が育成された児童生徒がこれからの先行き不透明な社会を乗り越え、20年後の社会の中で存分に力を発揮していることを切に願う。

最後に本研究の趣旨を理解し協力してくださった研究協力校の校長先生をはじめ、4人の研究協力員の先生方や教職員の皆様、そして何事にも一生懸命に取り組んでくれた児童生徒たちに、心から感謝の意を表したい。